

## 小高句麗の建國：「小高句麗鬪の研究」第三章

日野，開三郎

<https://doi.org/10.15017/2334010>

---

出版情報：史淵. 72, pp.1-52, 1957-02-28. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 小高句麗の建國

——「小高句麗國の研究」第三章——

日野開三郎

上來二章にわたつて論述した安東都護府と高句麗遺民の処置、即ち高句麗討滅後に於けるその故領と遺民とに対する唐の処理は、小高句麗建國の由来を理解せんが為めの研究で、いはばその準備である。此の準備に基き本章に於いてはその建國を論究することとする。

## 第一節 小高句麗國の出現とその方位及び王統

一部の史書は高蔵の遼東都督失脚以来、高句麗遺民は奔散し高氏の君長も絶えたりと伝へ、又一部の史書は高徳武の安東都督赴任以後、高句麗人は奔散し高氏の君長も絶えたりと伝へてゐるが、然し唐代の文献を渉獵するに、却つてそれ以後に於いて先に撃滅された高句麗と全く同名の高句麗國（高麗國）の存在を伝へ、又その王統高氏の消息を伝へた記事が間々散見する。そこで先ず此の再現高句麗國に就きその方位・王統等を中心として考説する。

唐会要<sup>卷一</sup>○蕃夷雜錄・聖曆三年三月六日の条に

勅。東至高麗國。南至真臘國。西至波斯・吐蕃及堅昆都督府。北至契丹・突厥・靺鞨。並爲八番以外絶域。其使應給料各依式。

小高句麗の建國

とあつて聖曆三年（久視元年<sub>二</sub>七〇〇）当時、唐の東方に高句麗國のあつたことを明記してゐる。即ち高句麗國の再現である。又此の記事は、再現高句麗國に關する管見最初の所伝である。唐の正東は海であるから、此の東は正確には東北のことであらう。而して此の唐の東北に在つたと云ふ再現高句麗の占拠地としては、遼東を措いて外に求め難い。遼東以遠の地は新羅に没した半島か、高句麗勃興の地たる国内城（輯安）方面かでなければならぬが、半島では新羅、輯安方面では已に建国せられてゐた震の兩國が勢力を自覚しく伸展しつゝあつた実情<sub>註</sub>から考へて、共にかうした高句麗國の再現を容れる余地は有り得なかつた。又奥地靺鞨の住域も大祚榮の震國が席捲しつゝあつた。かくて遼東地方、即ち安東都護府の管域であつた地方のみが再現高句麗國の候補地として残されるのである。恰も安東都護府は一昨年たる聖曆元年に廃止せられてゐるので、此の点から云へば此所を候補地とするに好都合である。然し統いて聖曆二年に高德武を都督とする安東都督府が置かれてゐるので、此所を候補地とする以上、再現高句麗國と此の安東都督府との關係が問題となる。その詳細な考察は後文に譲らざるを得ないが、とにかく遼東を候補地とする外なく、半島や輯安方面に迄及んで居なかつたことは紛れない。して見れば再現高句麗國は嘗ての大高句麗の領土から新羅・震兩國に没入した半島と奥滿洲とを除く残余の地に建てられたものとなり、領域は數分一にすぎないこととなる。いはば小高句麗國である。聖曆三年は大高句麗滅亡（六六八）より計へて三十二年目、高藏の失脚（六七七）より計へて二十二年目、高德武の遼東赴任の翌年に當る。小高句麗國が高徳武の安東都督府と深い關係のあつたことが察せられるのは特に注意しなければならぬ。

次に冊府元龜<sub>卷九</sub>外臣部・朝貢門・景龍四年（景雲元年<sub>二</sub>七一一〇）四月の條に

高麗遣使朝貢。

とある。此の高麗が聖曆三年始見の小高句麗なる可きは論ずる迄もあるまい。聖曆三年より僅かに十年後のことである。聖曆の記事が唐より小高句麗への遣使の規定であるのに対し、此れは小高句麗より唐への遣使記事である。即ち相互の間

に使臣の往来があつたことを知る。続いて開元・天寶（七一三―七五五）年間にも此の國の存在を示す記事があり、降つて唐会要<sup>卷一</sup>○蕃夷雜錄・高句麗の項に

元和十三年四月。其國<sup>高句麗國</sup>進樂物兩部。

とあつて憲宗の元和十三年（八一八）にも尚此の國が健在して唐に入貢したことを伝えてゐる。<sup>註</sup>聖曆三年より計へて百十八年目に當る。而して此れは管見の限り小高句麗國に關する中國側史料の最後の記事である。然し此のことから直ちに小高句麗の滅亡がその後ち間もない頃であつたと推断することは、方法論的に許されない。滅亡の年は別個に研究す可きである。翻つて遼の史料を検するに、遼史<sup>卷一</sup>太祖本紀・九年十月戊申の條に

高麗遣使進寶劍。

とあり、神冊三年二月の條に

吳越・渤海・高麗・回紇・阻卜

<sup>中</sup>略。各遣使來貢。

とあつて、太祖即位の九年（九一五）十月及び神冊三年（九一八）二月に高麗が來貢したことを伝えてゐる。半島に王建が高麗國を建てたのは神冊三年六月であるから、若し遼史本紀の右所伝が正しいものとすれば、此の建國前に於ける右二回の入貢高麗は王建の高麗とは別のものとなり、当然此れを遼東の小高句麗國に比定しなければならなくなる。尤も遼史の太祖紀には、頗る稀ではあるが、信憑し難い記事が載つてゐるので、右記事も充分な批判を経た後ちでなければ信用出來ない。そこで翻つて同書<sup>卷七</sup>○屬國表を見るに、太祖九年の入貢記事はないが、神冊三年二月の入貢は記されており、更に翌月の條にも

高麗洎西北諸蕃皆遣使來貢。

とあつて、本記にない史料を加へてゐる。かくてとにかく王氏高麗の建國前に高麗の入貢があつたことだけは紛れないこ

とが察せられる。因みに太祖九年の入貢記事も史実を正しく伝へてゐるものと解せられるのであるが、その詳考は後文に譲る。尚遼史卷一高麗伝には

自太祖皇帝神冊間。高麗遣使進寶劍。天贊三年來貢。云云。

とあつて神冊年間の入貢を最初に記し、それ以前の入貢に及ばず、又神冊の入貢記事も此れを三年二月或は三月と明書せず、「神冊の間」とばかりしてゐる。此れは契丹に入貢した高麗に小高句麗と半島の王氏高麗との二つあつたことを知らなかつた遼史の撰者が、小高句麗の入貢をも王氏高麗の入貢と合点し、その為め王氏高麗建国前の高麗入貢記事の処置に困り、その間の調節をはかる為めに施した細工と解せられる。かう解すると、小高句麗は神冊三年迄存続してゐたと云ふことが出来る。聖曆三年より計へて実に二百十八年目に当る。その後ち小高句麗を指してゐると思はれる高麗國の所伝記事は見出せない。

小高句麗の國名を一目瞭然と伝へてゐる記事は頗る乏しく、上掲の數例はその主なものである。かうした史料の乏少が満洲史學に於いて最高水準を示し來つた我が國の東洋史學界に於いてさへ、今日迄その存在を見落して來た最大原因と思はれる。中國の東北辺外程遠からぬ所に建てられ、少くとも二百余年の長壽を保つたと推測せられる小高句麗の所伝記事がかくも乏しいのは、一見奇妙であり、その理由に就いて充分の考察を加へる必要があるが、それと共に、一目ではそれと判らないで然も小高句麗關係の史料であるものが残つては居ないか、慎重に検討して見る必要がある。事実、かうした心構へを以て當時の文獻に接するに、やはり有力な史料の伝存してゐることに氣附くのである。

冊府元龜卷九外臣部・國邑門に

靺鞨在高麗之北。其地在營州之東二千里。南與新羅相接。(西接)越喜靺鞨。東北至黑水靺鞨。地方二千里。編戶十餘萬。兵數萬人。

とあり、同書卷九外臣部・土風門にも「靺鞨国在高麗之北。」とて此れと略々同じ記事を掲げ、靺鞨（靺鞨国）の方位と

その四至とを述べてゐる。靺鞨国或はその略称としての靺鞨は、渤海国又はその前身たる震（振）国を指す。靺鞨なる語の指称内容には歴史的な変遷発展があり、時代によつて相違する所があるが、隋代唐初には高句麗族を除く在満洲通古斯系諸族の総名として用ひられ、その具体的な内容は粟末・白山・伯咄・安車骨・拂涅・黒水・號室等の七大部を含んで居た。高句麗が滅亡して後には、その影響でこれらの諸部に異動を生じ、開元・天寶時代になつて新に達妬・鐵利・越喜・虞婁・思慕・郡利・窟説・莫曳皆等の通古斯系諸族の名が知られると、依然存続して居た黒水や拂涅と共にそれらもやはり靺鞨と総称せられてゐた。所で粟末・白山両靺鞨の裔に一部の高句麗遺民が加はつて震国を建てると、その国勢は遽に強大となつて靺鞨中の最強勢力に發展した。やがて此の国の王は唐から渤海郡王に封ぜられ、因つて此の国は中国人に渤海靺鞨と呼ばれた。震↓渤海は満洲通古斯系諸族、即ち靺鞨諸族の間に懸絶した実力を有して覇を称へてゐたため、単に靺鞨と云へば諸靺鞨の代表的勢力たる此の国を指し、此の国は又単に靺鞨と呼ばれても居た。但し他の靺鞨と混同する恐れのある場合、或は峻別する必要がある場合は渤海靺鞨と呼ばれて居た。そしてやがて靺鞨の名を棄てて専ら渤海と称せられる様になるのであるが、それは渤海靺鞨に対立してゐた他の諸靺鞨を征服して渤海国民に編入統一して終つたからである。渤海靺鞨或は単に靺鞨（国）と呼ばれたのはその建国の初期で、大体開元・天寶・大暦の頃迄である。註57因みに大祚栄の国が震と称したのは聖暦元年（六九八）で、彼が渤海郡王に封ぜられたのは先天二年（開元元年〓七一三）であるから、註58渤海靺鞨の呼称が用ひられたのは開元元年以後と云ふことになる。然し震国の名称がそれと共に開元元年を界として全く用ひられなくなつたとは思はれない。その後ちも習用せられ、徐々に交迭して行つたであらう。又此の国を単に靺鞨と呼ぶ習はしは恐らく渤海靺鞨と呼ばれた開元・天寶頃に最も盛んであつたであらうが、それ以前、震国時代にも使用せられて居たであらう。震国時代已に満洲最強の靺鞨勢力となつてゐたからである。震↓渤海靺鞨を靺鞨（国）と呼んでゐる

る例は多い。冊府元龜卷九外臣部・朝貢門・開元元年十二月の条に

靺鞨王子來朝。奏曰。臣請就市交易。入寺禮拜。許之。

とあり、唐會要卷一蕃夷雜錄・開元四年正月九日の条に

勅。靺鞨・新羅・吐蕃。先無里數。每遣使給賜宜準七千里以上給付也。

とある靺鞨はその数例である。かく考察すると、先掲記事の靺鞨(国)が震↓渤海を指し、略々開元・天寶頃の狀態を述べたものであることを知る。更に「西接越喜靺鞨」とある如く、越喜靺鞨が渤海の西境に現れるのは開元末乃至天寶初年のことであるから、此の点を考慮に入れると、先掲記事は天寶初年以後の狀態を述べたものとなる。此の記事に依れば靺鞨(渤海)国は高麗の北に在つたと云ふ。此の高麗を大高句麗の故地を指す漠然たる用語と見る必要はあるまい。遼東の小高句麗国を指すものと解して何ら差支へない。云ふ所の南北の方位關係は正に一致してゐるからである、而して此の靺鞨(渤海)はその南境を新羅とも接してゐたと云ふ。して見れば渤海の南境は新羅と高麗とに接して居たこととなる。渤海と新羅との国境は咸境南道方面、即ち半島に於いて接して居たのである。換言すれば新羅は渤海の東南に於いて接して居たのであるから、残る高麗は西南に於いて接して居たと見る外ない。さうした高麗はやはり遼東の小高句麗を指して居るものと見なければならぬ。かくて天寶年間の小高句麗に関する一史料を得たこととなる。所で冊府元龜の同じ国邑門には

振国本高麗。其地在營州之東二千里。南接新羅。西接越喜靺鞨。東北至黑水靺鞨。地方二千里。編戶十餘萬。兵數萬人。風俗與高麗及契丹同。頗有文字及書記。

とあつて震国の題下に先掲の靺鞨国の記事と殆んど内容の同じ記事をしてる。註天寶時代に入ると渤海は殆んど渤海靺鞨・渤海等として中国の史書に書き記され、震国と云はれてゐる例は見当らない。従つて右の記事はもと靺鞨国の説明と

して残つて居た旧記を、靺鞨国と震国とは同一国であるから、後世の編者がそのままつて震国の説明に充てたのか、さもなくば震国の旧名が天寶迄尚慣用せられてゐて右の表現で立派に通用してゐたのか、その何れかであつたこととなる。何れを採る可きかは今後の研究に俟つこととし、小高句麗国自体の問題ではないので此所には省略する。

次に旧唐書<sup>卷三</sup>地理志の序文の末段に

今拳天寶十一載地理。唐土。東至安東府。西至安西府。南至日南郡。北至單于府。南北如前漢之盛。東則不及。西則過之。

とあつて天寶十一年に於ける唐の東境が安東都護府であつたことを明記してゐる。此の都護府は当時遼西郡故城に治する辺境の一小都督州的存在となつて居たこと、已述の如くである。即ち唐の国土は遼東には及んで居なかつたのである。所で右の原註に

漢地。東至樂浪・玄菟。今高麗・渤海是也。今在遼東。非唐土也。云云。

とて漢地の東境と天寶十一年に於ける唐の東境とを比較し、今は渤海・高麗が遼東に在るが、唐土では無いと述べてゐる。今とは漢代に対して用ひたもので、天寶十一年である。即ち天寶十一年頃には渤海と高麗とが遼東に並立し、共に唐の領外となつてゐたことを知る。此の高麗が小高句麗たることは云はずして明かであらう。

新唐書<sup>卷四</sup>地理志・靺鞨州の末尾に附載せられた賈耽の所謂道里記に四夷に入る中国の関口七箇所をあげて

一曰營州。入安東道。二曰登州。海行入高麗・渤海道。三曰夏州。云云。

とあつて山東の登州は海路より渤海・高麗に入る幹線交通道の関口なりと述べてゐる。道里記は徳宗の貞元十七年（八〇一）撰の皇華四達記であらうと云はれてゐるから、此の説に従へば此の高麗も遼東の小高句麗国と見ることが出来る。貞元十七年は小高句麗国の最後の入唐記事を残している元和十三年（八一八）より十七年前となる。所が続いて記されてゐる

る登州よりの海行路程を見ると、専ら新羅と渤海とへの路程を述べて高麗への路程には全く言及してゐない。又元和郡縣志<sup>三</sup>登州の条を見るに、その八到の項に

西。至海四里。當中国往新羅・渤海過大路。

とあり。

西北微東至大海北岸都里鎮五百二十里。

とあつて登州が今の旅順を経て渤海・新羅に入る海路の要口であることを述べてゐるが、小高句麗のことにはふれてゐない。そこで先の「海行入高麗・渤海道」とある高麗は新羅とするのがより適當であるとの説も生れ<sup>註62</sup>、又此の高麗は高句麗の故領たる平壤方面なりとする解釈も可能性をもつて来る。然し当時高句麗國が遼東に嚴存し、後述する如くその領土の東境は鴨綠江下流右岸に及んでゐたのであるから、「入高麗・渤海」を敢て訂正する必要はなく、文字通り受取つて差支へない。

天寶十四年（七五五）に勃発した安祿山の乱を楔機として内地にも列置せられた藩鎮の跋扈は史上に有名であるが、わけても横暴を極めたのは乱の中心舞台となつた河北道の諸藩で、封域を世襲し、官吏・軍人の任免を恣にし、租賦を私擅して手兵を強化し、所謂国内更に國を為し、唐朝の命令を奉ぜざること蠻貊異域に異らなかつた。就中、魏博天雄軍・恒冀成德軍・幽州盧龍軍の三節度使は驕藩中の元兇として互に固く盤結し、終始唐朝に拮抗した。此れを河朔三鎮と云ふ。彼等は唐朝の容喙を一切受付けない代りに、塞外に住む奚・契丹その他の侵寇に対しては自力で防禦に當つてゐた。又彼等東北諸族が自領内を通過して唐朝に入貢し、逆に唐使が夷狄に往來するのを共に妨げてゐた。或は唐朝容喙の端を開き、或は夷狄・唐朝相結んで腹背受敵の形勢を誘致することを恐れたからである。唐史を通檢するに、安史の乱以後、東北夷の入貢が目立つて少いが、それは主として三鎮の跋扈に因る東北辺境の梗塞によつてゐるのである。渤海國の入貢道

が鴨綠江より遼東半島に沿ひ、山東の登州に至る海道に由つてゐるのも、その一因は同じ事情に在つた。山東地方も亦憲宗時代迄は十余州を領する大藩の淄青平盧軍節度使が拠り、やはり自立世襲して唐朝の支配外に立つてゐたが、渤海・新羅等の出入を妨碍することなく、寧ろ此れを勸奨してゐた。海を距ててその侵寇を被る恐れは殆んどなく、況んや唐朝と結んで腹背揆攻の態勢を張る心配も無かつたので、その往来を保護奨励して貿易の利を収めるを得策としたからである。註三〇かうした形勢を觀察するに、小高句麗も亦陸路に由る唐朝支配地域との往来は困難で、海路に由らねばならなかつた筈である。して見れば「海行入高麗・渤海道」の記事に不合理な点は無く、寧ろ當時の大勢に吻合する所伝と云へる。敢て此れを「新羅・渤海道」の誤りと見る必要はあるまい。

藩鎮の跋扈に一大鉄鎚を加へたのは憲宗である。その在位十五年を通じて帝の精魂は藩鎮の制圧に傾倒せられ、先づ京西・四川の驕藩、次いで東南の凶藩、最後に山東・河朔の元凶が次々と制圧せられて行つた。河朔三鎮の中、魏博が朝廷に回収せられたのは元和十四年、成徳は憲宗の死後たる十五年十月、幽州は更に後れて翌長慶元年であるが、此れより先、憲宗の勇武に懼れを感じた三鎮は元和十二年の淮西節度使吳元済の誅滅を機として元和十三年の正月乃至四月の間に相次いで朝廷に恭順を申出で、従來の驕横不遜な態度を更めた。註三一東北異民族の入唐が此れで可能になつたことは推察に難くない。元和十三年四月に小高句麗が久々で入貢してゐるのは、その貢道上に介在して往来を妨碍してゐた三鎮が屏息した直後の機会を把へたものと解せられる。勿論、此の入貢が小高句麗側にその入貢意欲を燃え立たせる事情があつて行はれたことには相違ないが、それを可能ならしめたのは三鎮の恭順による貢道の再開であつたのである。

驕藩を討征彈圧した憲宗も、藩鎮を基調とする地方行政制度を根本的に改革することは出来なかつた。藩鎮制は一応そのまゝにして、此の制度の下に可能な範圍の中央政權の強化をなし得たにすぎない。それが為め、彼の死後、再び三鎮の跋扈を來し、憲宗以前の旧狀に立歸つた。唐朝も亦先に三鎮を回収した時の却つて莫大な費用を要した苦い經驗から三鎮

回収に固執することをやめ、寧ろ彼等の自立を黙認し、彼等をして自立態勢に随伴する夷狄の自力防衛を負担せしめ、唐朝自らは直接夷狄の侵寇に当る煩勞と費用とから免れる方針をとつた。註即ち東北異民族の処置は、憲宗の死後、暗黙の中に河北辺境の藩鎮に委ねられることとなつたのである。唐史を検するに、此れより後ちの東北夷に関する記事が愈々乏しく、最も近くに居た奚・契丹の動静さへ頗る窺知し難くなつてゐるが、此れは唐朝が彼等東北夷との直接交渉をさける方針をとつた結果、記録す可き交渉事件が少くなり、従つてその事情も唐朝には事実上判り難くなつてゐた為めと思はれる。小高句麗に関する唐代文献の所伝が元和十三年四月の入貢記事を以て最後としてゐるのも、主として此の様な貢道閉塞と唐朝の直接交渉廻避方針とに由つたものと解せられ、必ずしも小高句麗の滅亡を意味するものとは云へないのである。又渤海国が海路山東に來貢してゐた事実を鑑み、同じ海面に臨む小高句麗も、若しそれが健在してゐたならば、やはり海路來貢して然る可しとの考へが抱かれ、それが伝へられてゐないのは滅亡を意味してゐるのではないかとの推測が強く浮かんで來るが、此れ亦慎重な検討を必要とする。遼史に五代初期迄その存続を想はせる記事が伝へられてゐるからである。元和以後に於ける小高句麗の行方は頗る興味があるが、極めて究明の困難な問題で、後文に更めて専考する。

小高句麗国に関する唐代の所伝にはその王統及び豪姓に就いて述べてゐるものがある。冊府元龜卷九外臣部・降附門・開元三年二月の条に

突厥十姓部落左廂五咄之噉。右廂五怒失畢五侯斤註。及高麗王・莫離支高文簡。都督跌思大等。各率其衆自突厥相繼内屬。前後二千餘帳。

とあり、同書卷九外臣部・褒異門・同年八月丙辰の条に

高麗・吐渾等諸蕃降附、制曰。中。高麗王莫離支高文簡。中。高麗大首領拱毅等。中。文簡可封遼西郡王。云云。

とあり、同七年正月乙未の条に

封遼西郡王高文簡妻阿史那氏爲遼西郡夫人。文簡東蕃酋長。率衆歸我。故有是寵。

とあつて高麗王高文簡なる者の唐への帰降を伝へ、彼を東蕃酋長と説明してゐる。東蕃は唐の東方に居たから名けたものに相違なく、従つて此の高麗王とは小高句麗国王であつたこととなる。高文簡と共に来投した拱毅に就いては新唐書卷二突厥伝に「高麗大首領高拱毅」とあるから、やはり小高句麗の大首領で高姓の者である。次に冊府元龜卷九外臣部・封冊門・先天二年（開元元年）二月の条に

拜高麗大首領高定傳爲特進。

とある高麗も小高句麗に相違なく、従つて高拱毅の外にも高姓の大首領の居たことが知られる。小高句麗国王が西突厥の巨姓阿史那氏を娶り、突厥人や吐蕃・吐渾等と共に唐に降附したのは、此れ迄塞外を制覇して居た突厥の默啜可汗に従つてゐたのが、彼の老衰を見て相携へて離反したのである。又先天二年二月の高定傳に対する唐の授官は、右の小高句麗国王の降附を策して行はれた玄宗の術策である。但しそれらのことに就いては後文に更めて詳述する。以上の諸記事に依り、小高句麗の王統は高氏であり、又此の王家を繞る最有力豪族も高氏が多かつたことを知る。

大高句麗滅亡以後の文献に現れて来る高句麗（高麗）が再現高句麗国、即ち小高句麗を指してゐる場合の多いことは、此れ迄の引用例によつて充分明かであるが、然しすべての場合がさうであつたのではない。小高句麗とは関係のない高句麗（高麗）の用例も当時の文献に散見する。資治通鑑卷二咸亨元年四月の条に

高麗酋長劔牟岑反。立高藏外孫安舜爲主。云云。

とある高麗は大高句麗の故領（此の場合は半島）に在る高句麗人のことで、小高句麗とは関係がない。又冊府元龜卷三將帥部・立功門に

李孝逸爲玉鈐衛大將軍。則天文明元年。李敬業拋揚州乱。詔孝逸破之。斬首七千級。中敬業窘急。與其弟敬猷及唐

之奇・杜永仁・駱賓王等輕騎遁走至江都。携其妻子奔潤州。又將逃入海投于高麗。

とあつて、<sup>註</sup>事敗れた叛臣李敬業が潤州より海路高麗に逃れんとしたことが見えるが、文明元年（六八四）は大高句麗滅亡後十六年目に当り、安東都護府は正式に遼東に退いて半島を放棄してゐた時代であり、且つ敗亡の彼等が逃げ込まんとした所は唐の勢力の及ばない地でなければならぬから、それは唐が保持し切れないで放棄してゐた半島と見る可きである。従つて此の高麗も亦大高句麗の故領の意味で、遼東の小高句麗とは關係がない。此れらの諸例に依つて知られる如く、大高句麗滅亡後の文献に現れて来る高句麗（高麗）は必ずしもすべて小高句麗を指してゐたのでは無く、大高句麗の故地又は遺民を意味する用例もあつたのである。従つて大高句麗滅亡後の文献に現れる高句麗（高麗）の用語を以て直ちに小高句麗なりと解することは許されない。果して小高句麗を指してゐるか否かはその都度批判す可きである。以上に引用した小高句麗を指す高麗・高句麗の用例はかうした批判の結果蒐集し得た筆者の全史料である。此れらの明瞭に高句麗・高麗と指称してゐる小高句麗關係の記事から知り得た小高句麗國の实体は

(1) 遼東に位置してゐたこと。

(2) 王統及び最有力豪族は高姓であつたこと。

(3) 唐の文献では聖曆三年を始見とし、元和十三年を終見とするが、實際の國運はその上下に延びてゐたこと疑ひなく、従つて遼史に見える高麗が小高句麗らしく思はれること。

等の範圍に止まる。此れ以上の研究は間接の史料によつて進めて行く外ない。その第一の問題はその建国の年次と建国の経過とである。

## 第二節 小高句麗建國の経過

小高句麗の建國の経過を直接明示した史料はない。高句麗（高麗）の名をはつきりと伝へた史料は前節に掲げた諸例が管見の総てで、その中には建國の経過を示す記事は全く見出せないのである。従つて此の國の建設の経過は間接的方法によつて究明して行く外ない。そして此の間接方法の基礎となるのが、前二章に論述した安東都護府の沿革と高句麗遺民の処置とで、特に此の際大きく役立つのは高徳武の安東都督就任の一件である。

### 第一項 高徳武の安東都督赴任と小高句麗の建國

唐は聖暦元年に安東都護府を廢して都督府と爲し、高蔵の孫高寶元を都督として赴任せしめんとしたが実現するに至らず、翌二年に至つて高蔵の男徳武を赴任せしめ、都護府の所管を引継がしめた。安東都督となつた高徳武は遼東の高句麗人の最高統治者として、唐より受けた官は都督であつたが、その実体は君長たる可きものであつた、此れらのことは前章に論述した所である、所で同じ遼東の高句麗人の國家として小高句麗國が聖暦二年以後の史に現れて居る。このことは前節に詳述した如くである。かくて両者の間に密接不離の關係があつたことを想察せざるを得ない。思ふに高徳武の遼東入りこそは高句麗國の再建に外ならず、本稿に云ふ小高句麗國は此の高徳武によつて建てられたものであらう。以下此の推測の誤らざることを立証することとする。

先づ第一はその領域の一致である、安東都督高徳武は安東都護府の所管を引継いだのであるから疑ひもなく遼東の高句麗人を統轄したものであり、小高句麗國も亦遼東に位置して居たこと已述の如くである。此の一致は高徳武の安東都督就任を以て小高句麗の建國なりとする見解の有力な基礎となる。

第二は王統の一致である。小高句麗国が高氏を王家とし、又最有力豪族も高氏であつたことは先に論証した。小高句麗国の始祖を高徳武と見れば此の高氏王家の由来も自ら理解せられる。

第三は両者の史上に登場する年次の大略の一致である。小高句麗国の名の始見は聖暦三年で、それは唐から此の国への使臣の往来規程を伝へたものである。高徳武の安東都督就任は前年の聖暦二年である。従つて此れを小高句麗建国の年と見れば、その翌年に唐が遣使規程を作つたこととなり、その關係を円滑に理解することが出来る。

第四は新唐書の高麗伝に高徳武の安東都督就任を述べた後ち

後稍自国。至元和末。遣使者献樂工。云云。

とある記事で、此所に彼の子孫が国家を形成し、元和の末に入貢したと明記してゐるのである。元和末の入貢とは唐会要  
卷一 蕃夷雜錄・高句麗の項に

元和十三年四月。其国高句麗国進樂物兩部。

とあるに当るものと見る可きであらう。これらの諸点を綜合考察する時、高徳武の安東都督就任が小高句麗の建国に外ならなかつたことは、もはや疑ひを容れる余地がないであらう。果して然らば小高句麗の建国の経過は次の如くであつたととなる。

唐は儀鳳二年、旧国王高蔵を引出して安東都護府の監督下に遼東の高句麗人を統轄せしめんとしたが、彼の謀叛にあつて失敗した。次いで垂拱二年（六八六）、彼の孫高寶元の送り込みを考へたが着想に止まり、降つて聖暦元年（六九八）、安東都護府の廃止と共に再び彼を安東都督として遼東に送り、都護府によつて執行せられてゐた唐の遼東高句麗人の統治権を引継がしめんとしたが、此れ亦失敗し、翌二年（六九九）、高蔵の男高徳武を安東都督として赴任せしめることにした。そして此の就任が小高句麗の建国に外ならなかつたのである。かくて唐の官吏としての安東都督は小高句麗国王であ

り、小高句麗國王の唐の官吏としての地位は安東都督であつたことを知る。

小高句麗建国の経過が上述の如くであつたとすれば、その建国は唐の援助の下に行はれたものであり、且つ唐の建国の構想は早く儀鳳二年（六七七）に抱かれ、その実現迄に実に二十二年を経過してゐたこととなる。小高句麗の紀元元年は唐の聖曆二年、大震（渤海）建国の翌年に当り、西曆六九九年である。而して此の建国は大唐の援助に負ふ所多く、専ら遼東の高句麗人がその蓄積せる民族的エネルギーを發動して闘ひ取つたものではない。然し大唐の建国援助方針が定まつて旧王統を送るや、それがそのまま迎へられて国家を成したのは、やはり遼東の高句麗人に国家建設の意欲と能力とがあつたことを示す。その建国の意欲はそれより前に於ける高句麗遺民の活潑な反唐運動に於いて已に再三示されてゐる。只その建国意欲が實際行動として大唐の希望する方向に進められなかつたため、反唐運動としてその都度弾圧せられてゐたにすぎない。一度び此の弾圧を避け得る条件に遭逢するや、遂にその宿志を達して建国の実現となつてゐるのである。然し乍ら新羅が唐の強大な圧力を排除し勇敢に戦つて半島の民族統一を遂行して居ると比較すれば、遼東高句麗人の活力は問題にならぬ薄弱なものであつたと云はねばならぬ。小高句麗の建国以後に於ける發展を、新羅のその如く華々しいものに予想することは、上述の建国の経過に照して全く無理である。

高徳武の安東都督としての遼東入りは小高句麗の建国であり、小高句麗は殆んど大唐一代を通じて存続してゐたと思はれるが、一方に此れを否定する反証的所伝がある。即ち旧唐書<sup>卷九</sup>高麗伝、唐会要<sup>卷九</sup>高句麗の項等に高徳武の赴任に続けて「此れより安東の高麗戸は突厥・靺鞨等に分投して次第に減少し、高氏の君長も遂に絶えた」とある記事がそれである。上巻の本稿の見解を確固たらしめる為めには此の反証的記事の批判訂誤が必要であるが、便宜上、後文に更めて詳述することとする。

## 第二項 小高句麗国の領域と首都

小高句麗の国王は唐の官吏としては安東都督であり、その府は安東都督府である。而して安東都督府は安東都護府の降格として都護府の一切の所管を引継いだものである。従つて建国当初の領域は新城時代の都護府の管域に外ならなかつたわけである。都護府の所管として旧唐書の地理志が伝へてゐるのは十四州で、此の十四州を含む地域は、北は鉄嶺・開原附近、東は蘇子河流域の鎬京老城地方から鴨綠江河口右岸に至る線、南は此の河口右岸より蓋平を結ぶ線、西は大体遼河を以て境とする一帯の地域である。而して此の旧唐書の十四州が何時頃の都護府の所管を伝へたものであるかは容易に究明し難い問題である。その州名挙示の順序が新城を第一としてゐる点よりすれば新城時代の都護府、即ち中廢前の都護府の所管州を伝へたものの如く解せられるが、さればとて直ちにかく断定し去ることも多少躊躇せられる点認められる。

その詳細は後文に考説することとして此所には省略するが、とにかく此れによつて小高句麗の或る時代の領域が略々判明する。旧唐書の十四州に対し新唐書の地理志は更に九州を加へて二十三州としてゐる。此の九州を加へた地域は、先の十四州の地域に対し、北は開原を越えて東遼河流域北岸地区に達し、西は遼河の線を稍々西に越えてゐる。此の九州が新に増設せられたのは、後文に詳論する如く、開元末・天寶初年のことである。当時都護府は復活せられて居たが、遼西の地に在つて僅かに横から遼東を監視して居たにすぎない。所で此所に注意すべきは新唐書が此の二十三州を以て「安東都督府に隸す」と伝へてゐることである。安東都督は小高句麗であり、都督府はつまりその首都京城である。従つて安東都督府に隸すとは小高句麗国の所領であると云ふことに外ならぬ。開元末・天寶初年に至つて小高句麗の領土が拡張したことを知ると共に、聖暦二年に唐から与へられた安東都督の官が開元末・天寶初にも尚守られてゐたことを知る。小高句麗の領域及び域内州県名に就いては尚考察す可き余地が少くないのであるが、別に更めて領土及び州県制の専章を設けて詳考

することとし、此所では只建国前後の事情を知る参考として必要と思はれる如上の程度に止めておく。

小高句麗国王は唐の安東都督であつたのであるから、彼の治する国都は唐の官制で云へば安東都督府又はその略としての安東府と呼ばれたわけであり、又逆に唐から安東都督府又は安東府と呼ばれた所は小高句麗の国都であつたわけである。然らばそれは何処であつたか。史書には奇妙にも此れを伝へてゐない。

安東都督府は安東都護府の降格と云ふ形を以て置かれたものであるから、此の点を重く考へると、都督府は都護府と同様新城に置かれたと解す可き様に思はれる。或は当初は左様であつたかも知れない。然し新城は遼東高句麗人が奥地の同族と通じて反唐運動を起すのを監視防制する都護府の治所としては最適であつても、独立の目的を達して抗唐運動の必要を喪ひ、高氏の王統を迎へて専ら内治の便に重点を置く可きであつた小高句麗の国都の地としては必ずしも最適では無かつた。統治の中心として最適の地は、歴史が実証する如く遼城州（遼陽）である。従つて此の点から云へば小高句麗の国都は遼城州では無かつたかとの推定が生れる。初めは新城州であつたとしても早晚此所に遷つたのではあるまいか。遼東都督として儀鳳二年に遼東入りをした高蔵の治所を遼城州ではなかつたかと推測せられること、先述の如くである。此の問題の決定史料は未だ求め得ないのであるが、此所に大いに参考となる様に思はれるのは、新唐書<sup>卷四</sup>地理志・靺鞨州の項に引載する賈耽の道里記の「营州入安東道」の記事である。

營州。<sup>中</sup>略。東百八十里。至燕郡城。又經汝羅守捉。渡遼水至安東都護府五百里。府故漢襄平城也。<sup>中</sup>。自都護府東北

經古蓋牟・新城。又經渤海長嶺府千五百里。至渤海王城。云云。

此の記事中に見える燕郡城は今の義興、汝羅は大凌河下流右岸、安東都護府は遼陽となり、渤海王城は龍泉府の地に遷つたものを指してゐる。都護府の所在を遼陽に当ててゐる以上、此の記事は都護府が遼城州に在つた時代のものとなる。<sup>註</sup>都護府が正式に遼城州に在つたのは儀鳳元年から翌年迄の僅かに一年、仮駐の咸亨元年から計へても約七年の短期間であ

る。所が此れに前後する他の記述はすべて天寶以後のことである。汝羅守捉の設置は、後文に論述する如く、早くとも天寶二年以後、渤海の首都が顯徳府の地から龍泉府の地に遷されたのは天寶十三年（七五四）である。即ち都護府が遼城を去つてから八十年近くも後に起つた事件である。而して復置後の都護府は遼東には進出せず、天寶二年以後は遼西故郡城に治して居た。かくて右道里記の記事は大きな時代矛盾を含んでゐることとなる。此れをどう解するか。津田博士は此れを道里記が儀鳳中の材料と渤海建國後の材料とを併用したために生じた時代錯誤であると解せられてゐる。然し上掲全文を通読して時代錯誤のあるのは都護府の一条のみで、他は悉く渤海が龍泉府に遷つた天寶十三年以後の記述として終始一貫してゐる。そこで此の都護府の一件をも天寶十三載以後の記述と解し得る途はないかどうかを一考する必要があらう。その途のないことを確めて後ち初めて時代錯誤と論断するのが慎重な研究態度の様に思はれる。

安東都護府はその治所を転々と移動した。その中で遼城州は平壤と共にその正式駐在期間が最も短かく、僅かに一年ほどにすぎないが、他は何れも数年乃至十数年に及び、特に新城は二十数年の長きにわたつてゐる。従つて後世の者が嘗ての安東都護府の治所として代表的に一地名をあげる場合、遼城州を真先に取上げるのが当然であつたと考へられないう。平壤は同じ一年でも創置の地であるから、此れが代表的に取上げられることに不思議はないが、遼城州は些か事情が違ふ。道里記の撰せられた貞元末は安東都護府が撤廃せられてから四十余年の後ちであるから、そこに云ふ安東都護府とは現存の機関ではなく、嘗てそれが置かれてゐた故地と云ふ意味となる。道里記が「營州入安東道」の記事に掲げてゐる地名には嘗て都護府のおかれた地が数箇所ある。燕郡城・遼城州・新城州等がそれで、汝羅城もその附近の遼西郡故城に都護府が置かれてゐたのであるから、此れも算入して差支へない。所が賈耽は此の四箇所の中、駐在期間の最も短かつた遼城州のみをあげて都護府の故地とし、他の三処に就いてはそのことを云つてゐない。此れには何か然る可き理由があつたと見る可きであらう。その事情は全く判らない。然し若し小高句麗の都が遼城州に置かれてゐたものと仮定すれば、

その合理的な説明が可能となる様に思はれる。

小高句麗国王は唐の安東都督であるから、その都は安東都督府であつたわけで、遼城州は安東都督府、略して安東府の所在地であつたこととなる。而して此の安東都督府は安東都護府の降格した形式を以て聖曆年間に生れたものである。それは貞元末より大約百年昔のことである。此の安東都督府出現の由来は後人をして安東都督府の所在地即ち安東都護府の故地に外ならずとの考へを抱かせたであらう。賈耽もその時代に存在してゐた小高句麗の国都が遼陽に在り、唐側から安東都督府・安東府等と呼ばれてゐた為め、それより推して都護府の故地なりと断じ、事實は嘗て一年ばかり駐在したことがあるにすぎない此の地を、恰も都護府駐在の代表的故地なるかの如く書き上げたのであらう。果して此の考へが容れられるならば、小高句麗の国都は遼城州（遼陽）であつたこととなる。後文に詳論する如く、小高句麗末年の形勢もやはり此所を国都と見た時、最も合理的に解せられる。小高句麗建国当初から同じ地であつたかどうか、そこ迄深くは云へないにしても、その国連の最大部分を占める期間が此所を都としてゐたと見て大過ないのではないかと思はれる。

### 第三項 高氏君長絶滅・遺民散亡の記事の批判

高德武の遼東入りは小高句麗の建国であり、その統轄のもとに遼東高句麗人は長く此の地方に拠り、高氏の王統も連綿と引継がれてゐた。然るに此れを否定する史伝、即ち高氏の君長は絶え、遺民は散亡したとの史伝が一方に厳存してゐることは先に一言した如くである。高德武の遼東入りを以て小高句麗の建国に外ならずとする本稿の見解を確立する為めには、此の反証的史料を批判し処理することが必要である。

高句麗遺民の散亡、高氏君長の絶滅は一聯の句として唐代の主な史書には大抵採録せられてゐる。所がそれら諸書の記載を詳しく比較するに、記述の内容に注意す可き差異があるばかりでなく、記事の繫年に三段の大きな開きがある。

先づ第一は咸亨元年（七七〇）、半島に勃発した高句麗遺民の巨酋鉗牟岑の叛乱を唐の高偏（侃）が平定した直後に繋けて記されたもので、卷八通典一辺防典・東夷・高句麗の条に

其餘衆不能自保。逃散新羅・靺鞨。旧国土悉入於靺鞨。高氏君長遂絶。

とあるのがそれである。此れに依れば「餘衆不能自保」とある余衆とは、半島に於ける高句麗遺民のことで、それらが新羅・靺鞨に逃入したことになる。新羅に投入したことは紛れない史実であり、註五靺鞨に逃入したことも事実と見てよい。但し此の靺鞨に就いては二通りの解釈が成立する。その第一は此れを高句麗人と隣接して住む靺鞨、即ち主として白山靺鞨と見る解釈である。第二は此れを渤海国或はその前身としての震国を指す靺鞨と見る解釈である。此の場合、何れでも通じないことはないが、震の建国は此の時から約三十年の後ちに当るので、震国と見るのは些か無理の様で、前者の見解をとり白山靺鞨と見るのが穩当であらう。次にその「旧国土悉入於靺鞨」とある「旧国土」とは、此の場合、主として半島方面を指して居たこととなるから「入於靺鞨」とある一句は敢て否定する必要なく、そのまま受容れて差支へない。然し靺鞨だけでは不充分で、新羅をも加へなければならぬ。「即ち旧国土（半島）悉入於新羅・靺鞨」とす可きである。そして此の場合の靺鞨も一応二通りの解釈が考へられるが、やはり白山靺鞨と見るのが最も妥当であらう。白山靺鞨は大高句麗に征服せられて久しくその領土となつて居たのが、その滅亡によつて自由奔放の機を得たわけで、「旧国土入於靺鞨」とは正しくは嘗て大高句麗の国土国民であつた白山靺鞨がその羈絆を解かれて新に自立し得たことを意味してゐるものと解す可きである。通典の著者は唐の徳宗頃の人杜佑で、註六時恰も小高句麗国が遼東に存在しつつも河朔の梗塞で唐への入貢を絶つてゐた時代である。即ち唐の徳宗頃の人杜佑が咸亨元年の鉗牟岑の叛乱鎮定後に於ける半島の高句麗遺民の大勢を述べたのが

(イ) 半島内の遺民自ら保つ能はず、新羅・靺鞨に逃散

- (ロ) 半島内の旧国土は靺鞨（新羅を脱す）に没入  
(イ) 半島内の高氏の君長絶滅。

の諸点で、その云ふ所は完璧では無いにしても、誤つては居ないのである。新羅によつて統一せられた半島内に高氏の君長が立ち得る筈の無かつたことは云ふ迄もあるまい。

高句麗遺民の逃散、高氏君長の絶滅を伝へた第二の撃年は儀鳳二年の高蔵の失脚の時である。新唐書<sup>卷二</sup>高麗伝、資治通鑑<sup>卷二</sup>等の記事が此れに属する。新唐書の記事は

其阡<sup>註</sup>舊城往往入新羅。遺人散奔突厥・靺鞨。由是高氏君長皆絶。

とあり、資治通鑑の記事の内容も全く同じで、出典を一にしてゐることが窺はれる。而して此これらの両書には鉗牟岑の乱の鎮定後に於いて先掲通典の記事に該当するものは採録せられてゐない。両書に云ふ所の要点は

- (イ) 高句麗の旧城は往往新羅に没した。  
(ロ) 遺民は突厥・靺鞨に散奔した。  
(イ) 高氏の君長は絶えた。

となる。この記事は高蔵の遼東に於ける失脚事件に続けられてゐるのであるから、文体から云へば遼東の高句麗遺民を主として扱つて居るものと解しなければならぬ。所が第一の「旧城往々入新羅」は半島の形勢である。又第三の「高氏君長皆絶」も半島に限つたことで、半島外では高氏の君長は連綿としてゐる。即ち此の二条は高蔵失脚のあとに述べる記事としては全くふさはしくない。寧ろ拍子外れの記述である。恐らく此れは先に掲げた通典、又はその原典にあつた記事を、それが咸亨元年以後に於ける半島の形勢を述べたものであるにも拘らず、殆んど無批判に儀鳳二年以後に於ける遼東の形勢に移し入れたものであらう。儀鳳二年に此の記事をのせた新唐書・資治通鑑の両書が何れも咸亨元年には半島の大勢を

述べた通典の記事を省いてゐるのは、此の移動を思はせるに足る。上掲三箇条の中、正しく当時の遼東の形勢を述べてゐるのは第二条の「遣人散奔突厥・靺鞨」のみである。遼東に赴いた高藏の失脚は粟末靺鞨を通じて唐に離叛せんとしたことに由る。従つて散奔靺鞨は粟末靺鞨への散奔の事実を伝へたものと見ることが出来る。又先に高宗の顕慶二年(六五七)、唐将蘇定方に平定せられた西突厥は十姓可汗阿史那氏を中心に復興の兆を見せ、やがて突厥の復興隆昌時代に入るのである。その活動は儀鳳二年の翌々年たる調露元年(六七九)の頃より旺んになり、永淳元年(六八二)には河東の并・嵐諸州に寇し、翌弘道元年(六八三)には河北の定・嬀州に入寇してゐる。何れも儀鳳二年後五六年内のことである。かうした形勢を知れば、唐に反感を有ち独立の希望に燃え乍らもその制庄を排し得なかつた高句麗遺民中の少からぬものが、唐に積極的挑戦をなしつつあつた突厥に投じたことは充分あり得たと考へられる。即ち「散奔突厥・靺鞨」のみは史実として認められるのである。思ふに新唐書や資治通鑑(或はその共通の典拠となつた或る史書)は儀鳳二年の高藏の失脚以後に於ける遼東の形勢を概述するに當つて、一方に正しく該当する史料を用ひつつ、更に咸亨元年の鉗牟岑の叛乱後に於ける半島の形勢に該当する記事をも摺入したのであらう。摺入記事の原典は通典か又はその典拠となつた或る史書であらう。因みに新唐書や資治通鑑が宋人の撰で、後世に成つたものであることは云ふ迄もあるまい。

高句麗遺民の逃散、高氏君長の絶滅を伝へた第三の繫年は聖曆二年の高徳武の安東都督就任、即ち小高句麗建國の時、五代・石晉の劉昫の撰たる旧唐書卷九高麗伝、北宋の王溥の唐会要卷九高句麗の項等の記事が此れである。両記事ともに同じ内容で、共通の原典に拠つたことが窺はれる。伝の記事は

自是(高徳武就任)高麗舊戸在安東漸寡少。分投突厥及靺鞨等。高氏君長遂絶矣。  
(安東都督)

とある。その骨子は

(1) 高徳武の赴任(聖曆二年)以後、安東府管下の高句麗人は漸次減少した。それは

(四) 突厥・靺鞨に分投したからで

(イ) 高氏の君長は遂に絶えた。

の三項である。高氏君長の絶滅が絶対に誤りであることは已に明かにした所である。然し靺鞨・突厥への分投は否定出来ない。

聖暦二年に先つこと三年、萬歲通天元年に勃発した営州の契丹人李盡忠・孫萬榮等の叛乱を機として営州の城傍に居た靺鞨人大祚榮等は滿洲に逃入し、粟末・白山両靺鞨人と高句麗人とを糾合して大震国を建てた。建国の年は小高句麗建国の前年たる聖暦元年である。大震国が高句麗人と靺鞨人との協同に成る国で、後ちの渤海であることは云ふ迄もない。さすれば此の国の發展を見て此れに投帰する高句麗人が相当あつたことは充分考へられる。靺鞨が広く靺鞨人を総称する場合と、その代表的最強勢力たる渤海靺鞨を指す場合との二つあつたことは、先に論証した如くである。「投入靺鞨」の靺鞨がその何れであつたにせよ、確に事実を伝へた記事であることは紛れない。

調露元年の頃より始動的侵寇を開始した復興突厥はその後ち益々強く、殊に唐朝の女禍による対外制圧力の弛緩は此の勢に拍車をかけた。渤海の建国に動機を与へた李盡忠等の叛乱もその裏に此の突厥の跳梁が大きく作用して居た。契丹を制圧した突厥の勢力がやがて遼東に波及するは、此の地方の歴史地理に照して必然の勢である。事実、小高句麗が突厥勢力の影響を受け、多数高句麗人の投入を見たことは、開元三年二月、西突厥の巨姓阿史那氏の女を妻とする高麗王高文簡が有力酋長高拱毅と共に突厥の下を離れて唐に帰降してゐる事実に徴して明かである。「投入突厥」も全く紛れない事実である。

さて、鉗牟岑の叛乱以後、半島方面の高句麗遺民は多く新羅・靺鞨に投入した。此の頃、遼東の高句麗人も粟末靺鞨の間に投入する者が相当あつたであろう。安市城の乱に見られる如く、遼東の高句麗人も唐に対して相当強い反感を抱いて

るたからである。次いで高蔵の遼東に於ける失脚の際、又少からぬ高句麗人が鞞鞞や突厥に投入したと考へられる。更に小高句麗の建国後も北に地震↓渤海の發展あり、西に突厥の復興があつて、それらに投ずる高句麗人を少からず出した。又先に唐の内地に駆遷せられた者もあつた。して見れば遼東の高句麗人が漸次減少したことは殆んど疑ひないであらう。かう考へると、「高麗旧戸在安東漸寡少」の一句も史実を含むものとして受取ることが出来る。聖曆二年の記事は「漸寡少」も、「分投鞞鞞・突厥」も共に正しい所伝であり乍ら、只「高氏君長遂絶矣」に於いて大きな誤りを犯してゐるのである。そして此の誤りは已に儀鳳二年の条に於いて他の史書が犯してゐる所である。思ふに、此れは諸史が何れもそれぞれの時代に於いて遼東の形勢を正しく伝へた史料を原典として用ひ乍ら、一方通典に見える如き半島に於ける高氏君長絶滅の所伝記事に強く拘はれ、それが半島の形勢を限定的に伝へたものであることに充分の注意を払はないで、それをそのまま遼東方面の形勢に適用し、撰者が適当なりと思考した年代の所に勝手に挿入したのであらう。

通典の「高氏君長絶滅」は半島の形勢を述べたもので、その云ふ所は誤りでない。通典の著者杜佑は唐の徳宗頃の人で、その頃は遼東に高氏の小高句麗国のあることが未だ中国人によく知られてゐた筈である。従つて彼が遼東に就いて高氏君長の絶滅を軽々しく論述する道理は無い。此れを半島の形勢に限定して云つてゐるのは当然である。所が五代から北宋時代にかけて撰述せられた史書は此の半島に繋けられてゐた記事を勝手に遼東に移してゐる。それにはそれぞれの典拠があつたのであらうが、それにしても、とにかく五代・北宋時代の史家は已に遼東に在つた小高句麗国のことを知らなくなつてゐたことを示すものと云へよう。

以上を要するに、小高句麗国は大唐の都に置かれて居た大高句麗国の王統高徳武の遼東入り、即ち安東都督就任の聖曆二年（六九九）を以て建国第一年とし、恐らく遼州を首都として、唐の安東都護府下に在つた遼東地区の高句麗人を統轄して居たもので、大高句麗滅亡後、此の地区の高句麗人は或は鞞鞞に、或は突厥に屢々投入した為め、建国前後の戸口

は往時に比べて寡少になつて居たと云へ、その国運は長く続き、恐らく有唐一代を通じて存続してゐたのであつて、一部の史書が「高氏君長絶滅」を伝へ、恰もその亡国を思はせるが如き書き振りをしてゐるのは、撰者の認識不足に因る大きな誤りである。

### 第三節 小高句麗建国を繞る國際政局

小高句麗国は唐より安東都護府の所管を譲り受けて建設せられた国家である。即ち自らの努力のみによつて克ち得たものでは無く、大唐の庇護が大きく動いて出来た国である。従つて此の国の建国事情乃至原動力を専らその国民たる遼東高句麗人のエネルギーの蓄積に求めんとするのは妥当でない。寧ろ大唐を中心とする東亞の國際政局の中にその主因を見出す可きである。勿論、遼東の高句麗人の独立意欲は極めて強烈で、大高句麗滅亡の直後には屢々独立抗唐の運動を爆發させてゐるのであるが、その都度大唐の強大な圧迫を被つて惨敗した。かくて反抗毎に俘遷や犇散の高句麗人を多数に出して次第に勢力を減少した。小高句麗の建国は大高句麗の滅亡より約三十年の後ちで、此の間に所謂「高麗旧戸在安東者漸寡少」となつて、もはや独立を自力で闘ひ取る力を失つてゐた。そしてその時却つて唐から独立の機会を与へられ、小高句麗を建国したのである。されば此の国は唐の庇護の下に成立した国家であると云つて差支へない。此の国はその建国後に於いて国民が鞅鞅や突厥へ分投して勢力寡弱化の途を辿つたと云へられ、その大國への發展が報ぜられてゐないのは、一には隣接する諸大勢力の圧迫もあつたと云へ、一には此の國がもともと国民自身の旺盛な活動力に支持せられて出来たものでないことを示すものである。尤も外部より庇護支援を受けるや、忽ち國家を形成し得たことは、それ以前に於ける独立抗唐の運動と相俟つて、遼東高句麗人の社會が建国能力を有つ迄に成熟してゐたことを示すものではあるが、然しその結集せられた實力は當時の國際環境の下に於いて独立を成就するに足るものでは無かつたのである。此の點、新羅の半

島統一、完全独立が大唐の大きな妨碍を被り乍らも、よく鬱積した国民の精力を発揚し唐の干渉を排除して積極的に関与取られたものであるのと大いに異なる。かくて小高句麗の建国過程の真相を把握する為めには、此の建国を繞る国際政局の動きを明かにすることが緊要であることを知るのである。勿論、大陸に於いては如何なる国の建国と雖も国際政局の影響を大きく受けないものはないが、小高句麗の場合はその建国が寧ろ受動的に動いてゐるだけに、特に此の国際情勢の影響を大きく予想す可きである。よつてここに小高句麗成立の事情を明かにする立場から当時の東亜の国際情勢を論究することとする。勿論、小高句麗に直接關係を有たぬ国際問題には一切ふれない。国際關係一般の取扱ひは余りにも大きな課題で到底此所に取上げられないし、又その必要もないからである。

### 第一項 安東都護府の廃止と小高句麗の建国

安東都督任命の形式に依る大唐の小高句麗建国計画は、聖暦元年の高麗元差置に失敗した後、翌二年の高徳武差置に依つて漸く成功した。つまりその建国は聖暦元年より翌年迄かかつてゐるのである。所で此の建国への着手の年たる聖暦元年は、綏章二年以来三十年にわたつて遼東を總督し來つた安東都護府の廃止せられた年である。かくて安東都護府の廃止と小高句麗建国との間に不可分の關係のあつたことが察知せられるのである。此の關係に就いては従前の論述中に言及した点もあるが、尚此所に専考詳究することとする。

聖暦元年の安東都護府の廃止は、形式的に此れを見れば、唐の遼東統治機関の撤廃としてでなく、唐会要<sup>卷七</sup>三 安東都護府の条に

至聖暦元年六月三十日。改安東都護府爲安東都督府。

とあり、新唐書<sup>卷三</sup>六 地理志・河北道・安東上都護府の条に

聖曆元年。更名安東都督府。

とある如く、都護府より都督府への更名、更に適切に云へば、その降格として行はれたものである。此の形式に従へば都護府の統督の職任は、一段下格の機関ではあるが、都督府によつて繼承せられて行くたてまへとなつてゐたわけである。

従つて此の更改を形式的な面のみから眺めれば、遼東統治に対する従来の唐の政治的評価が切下げられたことにはなるが、全面的に放棄せられたことにはならないのである。然し此の更改のもつ眞の意義はかうした形式的な面からの考察では把握出来ない。寧ろ此の形式の内に含まれてゐる實質的な改変に深く注意しなければならぬのである。

都護府の都督府への降格と同時にその長官の都督に擬せられたのは高竇元である。旧唐書卷一九九高麗伝に

略。聖曆元年。封爲忠誠國王。委其統攝安東舊戶。

とあり、新唐書卷二〇高句麗伝に

聖曆初。略。更封忠誠國王。使統安東舊部。

とあるは此のことを伝へた記事で、文中に安東都督就任を明記した語句はないが、文勢より自らそれと察せられる。然し高竇元の都督は実現しなかつた。高氏の安東都督が実現したのは翌二年で、任官したのは高德武である。此の時の安東都督任官は、先に引用した如く、旧唐書の伝に

二年。又授高藏高德武爲安東都督。以領本蕃。

とあり、註新唐書の伝に

明年聖曆二年以藏子德武爲安東都督。

とあつて、註史に明記せられてゐる。而して此の高德武の都督就任が小高句麗國王への即位であり、その建国第一年であつたことは已に論述した如くである。高德武は唐に対してはその一官吏たる安東都督であり、都護府の都督府への降格によ

る都護の後継者として、従来都護府が有してゐた遼東高句麗人の統治権を譲り受け、此の統治権を部内に対しては高句麗王として行使してゐたのである。此れは渤海國の君長が部内に対しては王として君臨すると共に、その支配権を唐の忽汗州都督として唐から正式に承認せられてゐたのと軌を一にする。蓋し此の様な關係は唐の羈縻体制の基本的な方式として普く適用せられてゐたのである。而して渤海王の忽汗州都督は全く形式的なもので、都督なるが故の実質的な義務が唐から賦課せられてゐたわけではない。自らを天下の主なりと自負する中国の政治思想から、唐と国交を結ぶ諸國に対して唐が要求して居た形式的な主従様式にすぎなかつた。小高句麗王の安東都督もやはり同じ形式のものであるから、唐に対して内地の都督と同様の君臣關係が此れに伴つて成立してゐたと見る必要はない。唐の遼東統治は安東都護府の職任とせられて来たのであるから、若し此の安東都督を形式的のみならず実質的にも唐に臣従せしめて行く為めには都督府の監視機關として都護府をそのまま存置す可きであり、現に儀風二年の遼東都督に対しては安東都護府をその上に存統せしめてゐるのである。都護府を廢し、その職任を都督府に譲つたことは、此れを遼東の最高機關とし、更にその上から此れを監督する意圖の無かつたことを示す。而して此の唐の上よりする監督から解放せられた安東都督は中国人に非ずして高句麗の王統であつた。都督が自ら進んで内地の都督と同様の君臣關係を唐に対して固く守る筈はない。つまり唐は安東都護府を安東都督府に降格すると云ふ形式を以て、従来有して居た遼東の統治権を実質的に放棄し、此れを高句麗の旧王家に返還したのである。小高句麗國は此の返還せられた統治権によつて生れ出た國に外ならぬ。

安東都護府の廢止と小高句麗の建國との実質的な關係内容は以上の如くであるが、更に考へて見るに、小高句麗の建國の為に安東都護府を絶対に撤廢しなければならぬと云ふ必要はない。換言すれば唐の遼東統治権を全面的に放棄しなければならぬと云ふ根拠はない。小高句麗を建てしめ、此れを都督としてその上に都護をおき、唐の監督下に遼東高句麗人の自治を大幅に認めて行く方法もあり得たわけである。即ち都護府の降格と云ふ形式を以て都督府をおかずとも、都護府

をそのままにしてその下に安東都督府を別置し得たのである。先にも一言した如く、儀鳳二年の計画は此の方式であつた。又開元以後に於いても、小高句麗国王が安東都督として遼東を統治してゐたに拘らず、唐は別に安東都護府をおいてその疆域に當つてゐる。<sup>註</sup>要するに小高句麗建國の前提として都護府の撤廢を絶対に必要としてゐたのではない。とすれば、安東都護府の廢止は必ずしも小高句麗を建てしめんが爲めの必要から行はれたのではなく、別に都護府を廢止す可き事情があつて行はれ、その廢止に由つて生ずる種々の不利欠陥を緩和せんが爲めの処置として小高句麗の建國支援が行はれたのではないかとの考へが生れて来る。

安東都護府を廢止し、高句麗の君長を復位せしめて、此れに遼東の統治を一任せんとするは当時の宿將狄仁傑の固い持論で、それが結局廟議を動かしたものの様である。旧唐書<sup>卷八</sup>の伝に依れば、神功元年（聖曆元年の前年）上疏して、安東を成る負担が余りにも大きく、その爲め百姓の虚弊日に加はることを述べ、「罷安東以實遼西。省運費於遠方」と論じてゐる。資治通鑑<sup>卷二</sup>は此れを同年の十月の条に繋げてゐる。当時の彼は幽州都督で、時に營州を失つてゐた唐は幽州を東北經營の前線拠点としてゐたので、幽州都督たる彼の言は唐の東北政策に対して最も大きな力を有してゐた。同伝には更に

仁傑又請。廢安東復高氏爲君長。停江南之輻輸。慰河北之勞弊。云云。

とあつて、彼が重ねて安東都護府の廢止を論じ、高氏君長の復位を力説したことを述べてゐる。彼の此の所論は、聖曆元年から二年にかけて行はれた唐の遼東政策と正に一致してゐるから、先に述べた都護府の廢止、高氏君長の復位等は総て彼の此の意見に基いたものと見る可きであらう。伝には右の奏文を承けて「事雖不行。識者是之」とあるが、「事雖不行」とは即時実行せられなかつたとの意味であらう。結局迄実現せられなかつたと云ふのではない。事實は聖曆元年より二年にかけて彼の意見通り行はれてゐるのである。尚右第二の奏文は資治通鑑<sup>卷二</sup>神功元年閏十月の条に繋げられてゐる。又

唐会要<sup>卷七</sup>三、安東都護府の条、通典<sup>卷一八六</sup>一、辺防典・高句麗の項等にも掲載せられ、且つ此れら両書の記載が最も原文に近い形を保つてゐる様であるが、その繫年を二年後の聖曆二年に置いてゐるのは明かに誤りである。聖曆二年は安東都護府が廃止せられた翌年で、今更その廃止を反覆力説する必要は無かつたからである。又会要には「臣請罷薛仁貴。廢安東鎮」とあるが、旧唐書<sup>卷八</sup>三、薛仁貴伝に依れば、彼は代州都督として突厥の阿史元珍を雲州に破つた年に七十歳を以て薨じており、又会要<sup>卷九</sup>四、突厥の項に依れば、彼が阿史元珍等を破つたのは永淳元年（六八二）十月であるから、結局彼は都護府廃止の十六年前に已に死んでゐたこととなる。即ち「罷薛仁貴」は明かに誤りで、通典に「罷薛訥」とあるのが正しい。廃止の時に都護であつたのは薛訥である。薛訥は仁貴の子であるから、創置当初の安東都護は父、二十九年後の廃止当時の都護は子であつたわけである。<sup>註</sup>

安東都護府の廃止、即ち唐の遼東統治権の放棄に就いて、狄仁傑の上疏にはその理由を負担の過大と輻輳の煩勞とを省くに在りと論じてゐる。一見、首肯し得る理由の様であるが、然し此れ迄全く論ぜられなかつた負担の過大・輻輳の煩勞が此の時急に喧しく論ぜられるに至つた事情を一言も述べてゐないのは物足らぬ説明である。此の時、都護府維持の負担過大が事新しく問題とせられるに至つた事情、これこそは遼東放棄の原因であり、此の原因によつて放棄した遼東の秩序を出来るだけ親唐的に保たしめんとして採つた方法が小高句麗建国の支援であつたと解せられる。然らば此の遼東放棄を敢てせしめた原因、即ち遼東への補急を遽に唐の過大負担と化せしめた事情は何か。それは西方遊牧民族の營州攻陥による滿・華交通幹線の遮断梗塞と云う大事件であつた。よつて次に此の問題に論及することとする。

## 第二項 突厥の復興・契丹の叛乱と小高句麗の建国

唐の高宗は生来病弱であつたため、その晩年には国政を皇后武氏に委ね、疎腕の武后は次第に政權を収めつつあつたが、

高宗の死（六八三）後は太后として愈々その政権を固め、中宗・睿宗の廢立を行い、更に皇室の主要人物を盡く斃して自ら位に即き（六九〇）、國を周と号した。所謂則天武后である。周の天下は十五年（六九〇—七〇五）で終つたが、高宗が歿して武后が政権を擅にしてからの年数を通算すれば二十年を超える。武后の晩年に中宗の復辟を見たが（七〇五）、その後韋氏も亦武氏の掣に倣つて中宗を弑し、權勢を擅にした。中宗の從子李隆基蹶起して韋氏を誅し、父の睿宗を位に復し（七一〇）、次いでその禪を受けた（七一二）。此れが唐室中興の英主と云はれる玄宗である。武・韋の女禍に唐朝の政治が攪亂せられること、前後を通じて三十年近くに達する。此の禍が太宗・高宗二代の間に築き固めた大唐の盛世に大きなひびを入れたことは云ふ迄もない。

武・韋跋扈の弊は先づ内政に現れつつあつたが、未だそれは大きな問題として表面化するには至らなかつた。大問題となつたのは塞外の形勢で、太宗・高宗時代に討滅彈圧せられた北方民族が猛烈な勢ひで此の間に復興し、大きな辺患をなすこととなつた。此の復興の先頭を切り、且つ最大の勢力となつて最大の脅威寇害を与へたのは突厥である。突厥は太宗に征服せられて以来、一時雌伏を余儀なくせしめられてゐたが、高宗の晩年より次第に勢力を恢復し、調露元年（六七九）、奚・契丹を煽誘して營州に侵寇し、爾來骨篤（都）祿・默啜等の巨酋に領導せられて殆んど侵寇せざる歳なく、塞外の形勢漸く憂ふ可き状態を呈しつゝあつた。復興突厥の離畔は塞外の動搖を招き、此れに附して唐に叛抗する者を続出せしめた。長寿二年（六九三）には室韋の叛あり、次いで萬歲通天元年（六九六）、契丹の大叛乱が勃発した。是の年五月、營州城傍に居た契丹の松漠都督（契丹の総帥が受ける唐官）李盡忠及びその妻兄孫萬榮は營州都督の施政に不満ありとて兵を挙げ、營州を陥れて此れに抛り、征討の唐軍を破つて長城内に侵入した。李盡忠は十月に歿したが、孫萬榮の兵勢は依然として熾んで、翌神功元年（六九七）三月、再び唐の征討軍を破り、形勢愈々險惡に見えた。六月、孫萬榮も部下に殺され、此れより契丹叛徒の勢力は幸に下火となつて行つたが、然し突厥の塞外盤拠は終に唐の營州恢復を容さなかつた。

李盡忠等の叛乱は明かに突厥の背後よりする煽動に乗つたのであるが、然も突厥は一旦契丹が唐と事を構へるや、その虚を衝いて老幼子女貨財を捕獲し去り、此れが為め契丹は完全に突厥に服事せざるを得なくなつた。契丹の乱は収まつても突厥の勢力は愈々猖獗を極め、唐の手に負へなかつた。資治通鑑<sup>卷二</sup>○五神功元年三月の条の記事に依れば、突厥の可汗默噶は唐の使者を抑留して穀種・絨帛・農器・鉄を強請し、結局、穀種四万斛・雜綵五万段・農器三千具・鉄四万斤を得、此れによつて益々強盛を加へたと云ふ。聖曆元年（六九八）には自ら河北の地に侵入して唐を圧迫した。然し所謂女禍の爲めに内政の弛緩してゐた唐側は軍の氣勢振はず、跳梁する突厥を擊砕することが出来なかつた。かくて唐は營州の恢復を一応断念し、州を引揚げて幽州の漁陽（今の北京の北部）に僑治し、漁陽・玉田（今名同じ）二県を領して州名を維持せしめることとした。<sup>註</sup>かくして滿華交通の幹線は萬歲通天元年（六九六）以来、その中間に在る營州の管内で遮断せられて終つたのである。此の遮断によつて遼東に対する唐の統治力が著しく薄弱化したことは云ふ迄もない。

滿華交通の幹線路は、漠・三國の昔より隋唐に至る迄、遼陽より北鎮・義県等を経て朝陽（營州治）に至り、それより大凌河を溯り、平泉・承德・滦平の諸県を縫ひつつ古北口より長城内に入り、密雲・順義を経て北京に達する街道で、時には朝陽より大凌河を溯り、青龍河に出で、盧龍より玉田・三河等を経て北京に達する街道も用ひられてゐた。何れにしても朝陽を経由して居たので、此所が滿華交通の最大要衝であつたと云へる。遼陽より錦県を経て山海関に入る沿海道も古くから用ひられては居たが、実用上に不便があつて、<sup>註</sup>上述の山谷を辿る正街道が政治的な事情で梗塞した時に用ひられる副次的な街道となつてゐた。營州の所管地域は此の両街道を二つ乍ら抑へてゐたので、營州の失陥は遼東と中国本土との交通運輸の断隔と云ふことに外ならなかつたのである。

膨脹せんとする遊牧勢力は必ずその方向の一端を遼東に向けてゐるのが歴史を一貫して見られる現象である。<sup>註</sup>殊に隣接して住む契丹の場合は自衛的な意味からも遼東の制圧を必要としてゐた。資治通鑑<sup>卷二</sup>○五によれば、五月に叛乱を起して營

州を陥れた契丹が総管燕匪石・宗懷昌等の率ゐる唐の防禦軍を全滅したのは九月であるが、かうして唐軍を痛撃した契丹は直ちに遼東の経略を開始してゐる。即ち陳伯玉文集卷八上軍國機要事に

臣竊聞。宗懷昌等軍失律者。乃被逆賊詐造官軍文牒誣召。懷昌等顛愚。無備陷沒。今諸軍敗失。東蕃固知。然恐安東阻隔未審此詐。國家若無私契與安東往來。臣恐凶賊多端詐偽復設。略中又賊初勝。不即西侵者。深恐阻略安東以自全計。若安東被阻略。則遼東以來非國所制。云云。

とあつて唐軍を覆滅せしめた契丹軍がそのまま直ちに侵入を続けられない理由を考へ、それは契丹が中国侵入に後顧の憂をなくする為め安東を攻略せんとしてゐるに違ひないからであると述べ、その対策として安東と早く聯絡し事情を通じておく必要ありと論じてゐる。事實は正にその通りであつた。資治通鑑卷二五萬歲通天元年九月の条に

上。欽寂許欽寂時爲龍山軍討擊副使。與契丹戰於崇州。軍敗被擒。虜將困安東。令欽寂說其屬城未降者。安東都護裴玄珪在城中。云云。

とあるは、營州を陥れた契丹の銳鋒が遼東にも向けられてゐたことを示す。崇州は、旧唐書卷三九地理志・河北道・崇州の項、新唐書卷四三地理志・崇州の項等に依れば、帰降の奚人部落を以て營州管内の廢陽師鎮に置いてゐたものであると云ふ。又龍山とは、右の胡註に依れば慕容氏鮮卑の和龍山なりとあるから、營州附近の山である。旧唐書卷五九許紹伝の子欽寂の条に依れば、彼は契丹の叛乱に当り夔州都督府長史より龍山軍討擊副使に転ぜられ崇州に於いて戦敗就擒したものであると云ふ。それは契丹が安東を囲まんとする少し前のことで、契丹は此れを捕虜として安東経略に利用することを考へ、都護に投降を勧誘せしめたのである。上文に続いて

欽寂謂曰。狂賊天殃。滅在朝夕。公但勵兵謹守以全忠節。虜殺之。

とあつて欽寂は我が身の危険をも顧ずして安東の將士に守節を励ましたと云ふ。遼西の聯絡路を絶たれて遼東に孤立した

都護府下の將兵は恐らく本国からの救援軍が契丹を打破つて馳せ来るであらう日を鶴首してゐたに相違ないから、欽寂はそれと察して士気を鼓舞したのであらう。その後の遼東の戦況は、此の際最も重要な点であるにも拘らず、史はその顛末を伝へてゐない。然し裴玄珪のあとに尚薛訥が都護として交代してゐる事実から推すに、都護府はその所管に可成りの被害を受け乍らもとにかく遼東を支へてゐただけは紛れない。然も此の遼東防衛には都護府管下の高句麗人が大いに奮戦してゐた様である。陳伯玉文集卷一為建安王与遼東書に

月日。清邊道大總管建安郡王攸。宜致書於遼東州高都督蕃府賢甥。某至仰知破逆賊孫萬斬十有餘陣并生獲夷賊一千人。中略以數百之兵當二萬之寇。中略非都督智勇過人威名遠振。誰能以少擊衆。陷衆摧兇。使國家無東顧之憂。是都督之力也。賢甥俊酷似其舅。云云。

とあり、同書卷四為建安王破賊表に

臣某言。今日日。得遼東都督高仇須等月日破逆賊契丹孫萬斬等一十一陣露布。并提得生口一百人送至軍前。

とある等は遼東都督高仇須等が少数の兵を以てよく契丹軍を邀撃してゐたことを示す。資治通鑑卷二に依れば攸の清邊道行軍総管任命は萬歲通天元年九月で、翌年三月には王孝傑が総管として契丹と戦ひ大敗してゐるから、右高仇須等の活動も元年後半から二年初の頃迄のことと解せられる。遼東州は契丹軍東進の正面に当るので最も多くその攻撃を被り、かくて都督高仇須等の活躍となつたのであらう。かうして遼東に孤立した安東府に対し、唐は士気を励ます書をしきりに送つてゐる。同文集卷一為建安王与遼東書に

榮營の州士人及城傍子弟。近送密款准待官軍。某令將蕃漢精兵四十萬衆。云云。

とて、今にも契丹を破つて營州を恢復し安東府に聯絡し得るかの如き書を遼東に与へてゐるのはその一例である。又同書

○卷一為建安王与安東諸軍州書に

日月。清邊道行軍大總管建安郡王攸。宜致書安東諸州刺史并諸將部族官屬等。初春猶寒。公等久統兵馬。云云。

とて諸將・部族・刺史等に慰勞の辞を送つてゐるのは、安東府の防衛に高句麗人が奮闘してゐたからである。然し此の様な唐の書辞にも拘らず、戦況はしばらく不利に展開し、遼西は喪はれて遼東を孤立に陥れた。唐は萬歲通天元年八月の第一回決戦に殲滅の大敗を喫し、翌二年三月には十七万の大軍が再び決戦に敗れて覆没した。五月には更に二十万の征討軍を出したが、も早や決戦を挑む勇氣がなかつた。つまり遼西交通路の打通を焦り乍ら如何ともなし得なかつたのである。契丹の叛徒は一年ばかりで鎮静したが、裏から此れを動かしてゐた突厥が強大で常に唐を圧迫してゐたため、遼西失地の恢復、遼東への通路確保は依然として出来なかつた。突厥の強盛を考へる時、近い将来に於いてそれが實現出来さうな望みも無かつた。かうした大勢を眺めるならば、營州失陥以後、唐の東北控制の第一線に押出されて来た幽州の都督狄仁傑が安東都護府の撤廢論を唱へ、廟議が此れに従つたのは止むを得ぬ処置であつたと云へよう。つまり大唐をして長年經營の遼東より手をひかした直接最大の因子は營州失陥による陸上交通幹線の遮断による遼東の孤立化に在つたのである。所で此の断隔の年たる萬歲通天元年から都護府撤廢迄は二年、安東都督高德武の差遣迄は三年の歲月があり、此の間に都護の裴玄珪と薛訥との交代が行はれてゐる。此の間、遼東に対する唐の聯絡補給は如何にして行はれてゐたか。唐から遼東に対して屢々鼓舞激励や情報交換等の聯絡が講ぜられ、又遼東からも唐に対して捷報の通達や捕虜の送付が行はれてゐたことは陳伯玉文集によつてその数例を先に紹介した如くである。かうした聯絡は海路に由つてゐたのであつて、そのことを示す第一の史料はやはり同文集である。同書<sup>七卷</sup>柴海文は海神を祭つた文であるが、その中に

萬歲通天二年月日。清邊軍海運度支大使。虞部郎中王玄珪。敢以牲酒馳獻海王之神。神之聽之。略中。王師用征。故有渡遼諸軍橫海之將。天子命我羸糧景徒。今旌甲雲屯。樓船露集。且欲浮碣石凌方壺襲朔裔。

とて萬歲通天二年の初め大海軍を以て遼海を渡らんとし、その準備がすつかり出来上つてゐたことを述べてゐる。更に

同書卷一為建安王与遼東書の一節に

令將蕃漢精兵四十萬衆別取。某月日百道齊駛。分五萬蕃漢精兵。令中郎將薛訥取海路東入。舟楫已具。來月亦發。請

都督勸兵秣馬以待此期。中都督官屬及大首領并左右立功人等。云云。

とて契丹討伐の精兵四十万が已に集結を了つてゐること、その中の蕃漢五万は薛訥が率ゐて海路より安東に入り安東在来の軍と合流する手筈で舟楫も亦整つてゐること、都督・大首領等互に力を協せ心を一にして唐軍の來援迄頑張るべきこと等を述べてゐる。四十万・五万の数は勿論遼東の高句麗人に対する牽制的な誇張であるが、とにかく有力な部隊が薛訥に率ゐられて遼東に海路から送り込まれたことは紛れない。都護の裴玄珪から薛訥への交代もかうして行はれたのであらう。乱の勃発以來の遼東と唐との聯絡が海路に由つてゐたことは此の海上大輸送の断行から容易に察せられる所である。

さて遼東に大部隊が送り込まれると、従来の通信聯絡に加へてその軍糧補給の問題が生じて来る。輸送船は已に部隊の輸送を了つた船を充て得るし、その運営の爲めには海運大使があつて機構も亦骨組みが出来てゐたわけで、残る問題は糧秣の調達と船団の運営方法とであるが、此の点に就いて解決の緒を与へてゐるのは幽州都督狄仁傑の上疏である。その一節に

今海中分爲兩運。風波飄蕩。沒溺至多。准兵計糧猶且不足。云云。

とあつて、安東への補給に就き

(イ) 二船隊を運営してゐること。

(ロ) 風波の爲めに溺没するものが多いこと。

(ハ) 然も安東に在る兵数から当然必要とする量（兵糧は一兵一日米二升）を送り得ず、不足してゐること。

等を述べてゐる。頗る簡略で、詳細な点に及んでゐないが、補給に関する唯一の史料として重要なので、右の三項目に就

いて出来るだけ詳しく掘下げて考察する。

先づ第一は「分為兩運」の一句で、それは直接には二船隊と解せられるのみであるが、更に此の二船隊への分割編成の理由を考へるに、恐らく二航路あつたためであらうとの推測が生れる。尚此れと聯関して考ふ可きものは、先掲の別の奏文に「停江南轉輸。慰河北之勞弊」とある一句である。此れに依ればその補給物資、云ふ迄もなくそれは主として食糧であるが、此の食糧を遠く江南の所産に仰ぎ、北は河北より南は江南に至る一帶の重い負担となつてゐることが知られる。隋以来、北支の民食や官祿軍糧が北支の生産のみでは自給し難く、遠く南支からの漕運に仰給してゐたことは周知の如くである。かかる状態で北支より更に滿洲に補給しなければならなくなつたとすれば、それだけ多くを南支からの輸送に俟たねばならなかつたわけである。かう考へると、「江南轉輸」とは必ずしも江南から遼東への海路による直接補給を意味するものではなく、寧ろ江南から河北へ、河北から遼東への逐旋補給が行はれてゐたことを指してゐるのであらう。「停江南轉輸」が「慰河北之勞弊」と結合して考へられてゐるのは、直接補給でなく、逐旋補給であつたことを示す。陳伯玉文集卷六上軍国機要事の一節に

江南淮南租船数千艘。已至鞏洛。計有百餘萬斛。所司便勒往幽州納充軍糧。云云。

とあるのも右の逐旋補給を示す確証である。此の様に逐旋補給を行つてゐたとすれば、遼東への補給が廢止せられた場合、それだけ江南の漕運が停減せられ、江南の民は勿論のこと、河北の民もその漕運に伴ふ負担から免れ得たわけで、「停江南轉輸。慰河北之勞弊」が指す内容をかう確認すると、遼東への補給海路は主として渤海灣で、江南に至る黄海、東支那海は殆んど關係がなかつたと見て誤らないであらう。補給の二船隊が往來したと云ふ二航路は共に此の渤海灣に求む可きであらう。従つて船団の発着基地となつた港浦も渤海灣沿岸の、背陸に於ける輸送の便宜に恵まれた河渠沿ひの地に求む可きで、中国側では河北・山東、安東側では遼河沿ひの地が有力候補として考へられる。特に中国側では山東よりも河北

が中心で、此のことは薛訥の率ゐる渡海の大部隊が河北に集結してゐたことから容易に推測せられる。即ち両船団の一は河北と遼河流域とを結び、他は山東と遼東とを結ぶ所の二航路が恐らく「分爲兩運」の内容であつたと解せられるのである。更に此の航路を具体的に探る爲めには、後年の類似例を以て逆推して行く外に手掛りがない。

開元・天寶時代、辺境に節度使が置かれ、大軍が常駐せられる様になると、その軍糧の補給が大仕事となつた。唐代の軍糧政策は別に論究せられる可き大問題で、此所に詳述する邊はないが、河北方面に就いて見るに、幽州と平盧との二藩は大體併せて軍糧の補給が考へられてゐた。その第一の補給源は一般諸藩と同様屯田（後ち營田に切換）収入であつた。第二は広大肥沃な河北平野から収納せられる租粟で、天寶末の定めでは歲額七十万石が軍糧に充てられてゐた。第三は和糴で、歲額布帛八十万疋段と錢若干万貫が与へられてゐた。然し管内の所産は軍糧を充すに足らず、殊に遼西の平盧はその不足が甚しかつたので、管外から調達して輸送してゐた。而藩の常備兵力は合して天寶元年に推定約十五万、天寶二年以後は平盧管下の大凌河以東に於ける増兵が著しく、その爲め此の年を境として此の方面への輸送が激増した。かくて糧食の補給は陸運だけでは間に合はず、海運にも依存してゐた。その詳細は別に専考するが、取敢ず此所に必要な部分をのべると、資治通鑑卷二七唐紀・天寶十四年十二月（安祿山挙兵の翌月）の条に

祿山。以海運使劉道玄撰景城（滄州之郡名）太守。清池郭下尉賈載・塩山尉河内穆寧共斬道玄。得其甲仗五十餘船。  
云云。

とあり、海運の基港が、河北の滄州（今の滄県の東南）に在つたことを伝え、その胡註に

自帝玄宗事邊功。運青・萊之粟。浮海以給幽平之兵。故置海運使。

とあつて滄州に基地をおく運船は青州・萊州等、山東の粟を河北に運んでゐたものであると解してゐる。開元二十五年の式と云はれる唐水部式の一節に

滄・瀛・貝・莫・登・萊・海・泗・魏・博等十州。共差水手五千四百人。三千四百人海運。二千人平河。

とて海運水手三千四百人、平河水手二千人を徴収してゐたとあるは、明かに此の海運の使用に充てんが為めのものとして解せられる。右十州の中、河北の滄州、山東北岸の登・萊州、同南岸の海州（江蘇省・東海県）等は何れも当時の重要な海港であり、海州からは河運により楚州（同州淮安県）を経て大運河上の要地たる泗州（安徽省・盱眙県の北）に迄船を通じてゐた。瀛・莫の二州も亦当時の海岸に接する州であつたと想はれる。後に述べる如く、当時の海岸は今の天津より奥深く入り込んでゐたのである。而して魏・博・貝は河北遭運の要地、泗州は汴河上の要地である。従つて海運水手三千四百人は瀛・莫・滄・登・萊・海の六州から、平河水手は貝・魏・博・泗の四州から徴せられたのであらう。平河水手は山河水手に対する語で、単に平河・山河を以て平河・山河の水手をも指してゐた。海運水手の徴募が滄・瀛・莫等の河北道と登・萊等の山東との渤海湾沿岸諸州に於いて行はれてゐるのは、それら諸州の民が海運使の使用する運送船の水路に最もよく習熟してゐた為めに相違なく、従つてそれは登・萊等の山東の粟が海送せられてゐたことを示すものと云へる。又海州からも徴募せられてゐるのは、泗州の平河水手の徴募とにらみ合はせて、南支より大運河によつて北送せられる糧秣の一部が泗州より楚州を経て海州に漕運せられ、そこから山東半島を廻つて海送せられてゐた為めではないかと思はれる。尚登州からは渤海湾口を横切つて遼東の都里鎮にも兵糧を補給してゐたこと、先に水部式の他の一節に拠つて詳論した如くである。つまり開元・天寶時代の海運は

- (イ) 登・萊州より幽州・平盧兩藩に運送する航路。
- (ロ) 登・萊州より都里鎮に運送する航路。
- (ハ) 海州より山東半島を廻つて運送する航路。

等のあつたことが知られる。武后時代の安東都護府への補給航路として、此の三者の中、尤も可能性の多いのは第一の場合

で、胡三省の註に「運青・萊之粟、浮海以給」と云つてゐるのは、先づ正肯を得たものと云ふ可きである。第二の登・萊州より都里鎮への運送が武后時代に使用せられたとは些か考へ難い。都里鎮又は今の金州は漢・三国の昔から登・萊との船運の盛んであつた地であるから、武后時代にも此の航路によつて一度び金州灣に陸揚げし、それより今の復州・蓋平を経て遼陽に出る古来の街道を陸運する方法が一応は考へられるが、陸運は水運に比して経費が嵩み、特に労働力を多大に要するので、現地の中国人戸口が稀であつた当時、それが現実に用ひられてゐたとは考へ難いのである。第三の海州よりの廻送は、「江南輻輳」の仁傑の奏文から推せば或は併用せられたかとも思はれるが、何とも断定はしかねる。寧ろ陳伯玉文集の記事に従つて江南の粟は殆んど漕運によつて河北に運ばれ、それより海運によつたと見るのが穩当であらう。仮に廻送せられてゐたとしても、その量は少かつたであらう。海運使時代も同様にその量は多くなかつたと想はれる。登・萊州と安東とを結ぶ海路を第一とすれば、第二は滄州を中心とする河北から安東に補給する航路であつたと考へられる。河北は河南と共に元來北支第一の饑饉地である。開元末・天寶時代には幽州盧龍軍節度使管下の十万の大軍が河北北部に布置せられたため、糧食の自給自足が窮屈となつたが、契丹叛去以前の武后時代にはさうしたことは未だなかつたのであるから、滄州方面からの補給は登・萊方面よりも近便で、より多く運送せられて居たと見て大過あるまい。殊に河北からの積出し分は江南からの輻輳で補ふを得たのであるから、此の見解は一層強く支持せらる可きである。開元・天寶時代に於いても幽州管下の河北からは平盧管下の大凌河流域に海運に依つて少からぬ糧食を補給してゐたのであつて、此のことは別に詳述するが、先掲の水部式に博・魏・貝・泗の平河水手を徵募してゐるのは、河南・河北から糧食を河運によつて海岸に運び、更に北方に海送してゐたことを暗示する。恐らく第二航路は河北と安東とを結ぶものであつたと見て誤りあるまい。当時の河北に於ける渤海灣岸は現在に比して深く灣入し、今の武清・滄県を結ぶ線に達し、天津も海中に在つたのであるから、その港浦の地は判りにくいが、幽・滄二州の間に在つたことだけは紛れあるまい。旧唐書卷七韋挺伝

に太宗が大高句麗を討たんとした時のことを述べて、幽州より遼水迄の二千里間は州県がなく進軍の資糧を得られないのでその対策を彼に命じたと云ひ、

挺至幽州。令燕州司馬王安德。巡渠通塞。先出幽州庫物。市木造船運米而進。自桑乾河下至盧思臺。去幽州八百里。逢安德還曰。自此之外。漕渠壅塞。云云。

とある如く、命を受けた韋挺は幽州より桑乾河を下り海に出でんとして失敗してゐる。又同書卷一姜師度傳に神龍中のこととして

又約魏武舊渠。傍海穿漕号平虜渠。以避海艱。糧運者至今利焉。

とある如く魏の曹操が烏桓討伐の際に兵糧北送の為に掘つた舊運河に沿ひ海岸に並行した運河を掘つて海艱をさけてゐる。海上運輸が内陸の運河漕渠と結合してゐなければ榮へなかつたこと、河北の沿岸は淤塞が甚しくてその障碍を受けてゐたこと、又遠浅の爲め波濤沙灘の海難が多かつたこと、それにも拘らず、事あるごとに海運の要に迫られ、対応工事が行はれてゐたこと等を知る。

遼河の水運は近來淤塞が甚しくなつた爲め利用価値が頗る低減してゐるが、明代の頃迄は今の開原迄舟運を通じてゐたと云ひ、契丹時代も大洋通ひの大船が深く溯航してゐた。遼西の大凌河も同様である。旧唐書卷八劉仁軌伝に、百濟の滅亡後その鎮守兵団の司令官となつた彼が部兵の服装の余りにも悪いのを見てその故を尋ねたのに対して兵士が對へて

發家來日。唯遭作一年裝束。自從離家已經二年。在朝陽薶津。又遭來去。運糧涉海遭風。多有漂失。

と云ひ、營州の薶津より大凌河を下り渤海灣を横切つて朝鮮に渡航したことが知られる。降つて北宋の曾公亮等撰の武經總要卷一北蕃地理・中京四面諸州の項の建州の条に依れば、大凌河流域の建州・宜州と遼河流域の雙州とは南唐と提携する水軍をおき、此れを通兵軍と稱したと云ひ、東京四面諸州の雙州の条に

雙州。契丹号保安軍。有通吳軍營壘。東至逆流河二里。入生女真界。西至遼州七十里。南至瀋州七十里。云云。

とある。即ち瀋州（今の奉天）の北七十里の雙州迄大船を通じ得たのである。武后時代に山東或は河北より來航する補給船隊が殆んど都護府の新城（撫順）近く迄入り込み得たことを察するに足らう。此の遼河と登・萊州とを結ぶ海路は唐より五代にかけて相当利用せられてゐたことを示す史例が乏しからず伝へられてゐる。殊に五代には後梁と契丹とが盛んに往來貿易し、又李克用の晉國挾攻の策を通じてゐる。<sup>註34</sup>又契丹と江南諸國との間の海上交通貿易も遼河を利用してゐる。<sup>註35</sup>又遼東・遼西と河北とを結ぶ海運も頗る利用せられてゐたことを示す史例が少からず伝へられてゐるが、契丹時代に一例をとると、遼史<sup>卷五</sup>九食貨志・農穀の項の太平九年（一〇二九）の条に

燕地饑。戸部副使王嘉請。造船募習海者。移遼東粟餉燕。議者称道險不便。云云。

とあり、同書<sup>卷七</sup>一聖宗本紀・同年の条に

燕又仍歲饑。戸部副使王嘉復獻計造船。使其民暗海事者。漕粟以賑燕民。水路艱險。多至覆沒。

とて遼東より逆に燕、即ち幽州を中心とする河北北部の地に糧粟を運んだとある。契丹時代には漢・渤海人の徒民によつて遼東の産業が大いに開發せられてゐたので、かうした逆補給が行はれたのである。その船は覆没するものが多かつたと云ふ。武后時代と相当懸け離れた時代のことではあるが、造船航海技術に大した変化があつたとは考へられないので、採つて以て参考とするに足らう。狄仁傑も亦「没溺至多」いことを論じてゐる。然も武后時代の補給は兵糧を充すに足りなかつたと云ふ。尚唐代に於ける河北・山東と遼西方面との海上關係に就いては別に詳考して渤海灣海運の状況を明かにする予定である。

以上、直接の史料が乏しい為め、主として間接的な推測により、従つて絶対確実な断言は出来ないが、營州陸道梗塞後の安東都護府への補給聯絡が専ら海路に由つて行はれ、山東の登・萊州と河北の幽・滄州間沿岸とがその二大基地で、狄

仁傑の云ふ「今海中分為兩運」の内容は此の二水道を指してゐたと考へられるのである。たとへ此の水道の点は万一史実と多少外れた推測であつたとしても、海上より兩船隊を以て補給聯絡してゐたこと又は紛れない事実と云へよう。

かくの如く萬歲通天元年の營州陸道の梗塞以後は専ら海上交通に依つたのであるが、当時の造船航海技術を以てしては險海風濤の自然的制約を大きく受けねばならなかつた。隨時散発的な航海ならば比較的よくその患をさげ得たであらうが、常時的・船団的な大輸送は一層困難で、切迫した事情に対応する緊急輸送であつただけに危険が多く、「没溺至多」き犠牲を払はねばならなかつた。然もその輸送力は「准兵計糧尚且不足」る貧弱さを嘆かねばならぬ状態にあつたのである。所詮、海上補給は陸道の補助乃至一時凌ぎの役割をなし得るに止まり、交通運輸の中心的・恒久的な幹線となるには技術の発達が此れに及ばなかつたのである。従つて陸上幹線の打通、即ち營州の恢復無き限り、安東都護府、即ち遼東の維持は非常な難事業であつたわけである。狄仁傑が負担過大・虚弊百姓の故を以て都護府の撤廢、遼東の放棄を主唱したのは、かうした營州失陥後の新たな状態に対応した新たな遼東政策の必要からである。つまり唐の安東都護府の撤廢、遼東の放棄は遊牧勢力の滿華交通補給幹線たる營州の遮断によつて行はざるを得なくなつた止むなき処置であつたのである。

大唐の遼東放棄は遊牧民族に庄迫せられた結果の已むない処置であるが、かく遼東より手を引かねばならなくなつた唐が尚能ふ限りの勢力を跡に残して引揚げたいと念願し、その線に沿つた対策を講ずるのは、蓋し当然である。唐の遼東確保は遊牧勢力が滿鮮を従へて唐に対する包圍的な大勢力に發展するのを防ぐためであつたが、今や突厥が契丹叛徒の背後に於いて日一日と強大化しつゝあつたのであるから、右の念願は切実なものがあつた筈である。その方法として考へられるのは、今迄安東都護府が統治し來つた遼東高句麗人の土着勢力を利用し、此の地方の主住民として久しく高句麗を支持してゐた彼等自身に再び建國せしめ、遼東の統治を荷はせつつ此れを親唐の政權乃至盟邦として導いて行くことである。そしてそれは契丹の乱徒に対して採つた遼東高句麗人の態度から可成り有望な政策であるとして唐人に受取られたであら

う。即ち遼東都督高仇須等の活躍に見られる如く、契丹に対する高句麗人の態度は極めて反抗的であり、従つてその侵入防衛に就いて都護府に対し協力的であつた。孤立の都護府が数年よく遼東を守り得たのも土着の住民たる高句麗人の此の協同作戦に負ふ所が大きかつた筈である。それは主として高句麗人と契丹人との伝統的な宿敵視に因るものであつたのであるが、唐側から見て頼もしく感じたことは確かであらう。よつてかねて長安で唐が養育した旧国王の子を担ぎ出し、これを統主として小高句麗国を建てしめ、親唐国家の仕上げをはかつたものと解せられる。要するに對滿交通の幹線を營州で遮断せられた唐としては已むなく長年経営の遼東を放棄するに決し、安東都護府を撤廃したが、突厥興隆の状勢に鑑み、その跡に成可く唐の勢力を根強く残存せしめておかねばならぬ切実な必要から、親唐国家としての発展を期待しつつ小高句麗を建国せしめたのである。

唐の小高句麗育成の企ては儀鳳二年に第一回を着手して失敗し、垂拱二年に第二回を思ひつき乍ら実行に至らず、更に聖暦元年にも企てて行はれず、翌二年に至つて初めて実行せられたのである。第一回の試みは唐の半島放棄に乗ずる新羅・靺鞨・高句麗人等の反撃に備へんとした処置であり、垂拱二年の企ては漸く勃興し來つた突厥の東侵に対応せんが為めであつたと想はれる。垂拱二年の企てが実行迄に至らなかつたのは、突厥の情勢がさまで切迫してゐなかつたこと、国王に擬せられた高寶元が不適格であつたこと等に依るのであらう。此の両回の計画當時に於いては營州は唐に確保せられてゐたので、遼東の統治権を放棄する必要は無かつた。従つて安東都護府をそのまま存置し、その監督下に小高句麗を建国せしめんとしてゐる。所が萬歲通天元年に營州が陥り、遼東の維持は至難となつて、聖暦元年、安東都護府を廢止した。それと時を同じうして高寶元の差置が企てられたが、そのまま沙汰止みとなつた。恐らく寶元に難色があつた為めと思はれる。然し都護府を廢して遼東を全く放棄した唐として、今やそのままに放任することは許されず、かくて翌二年の高徳武差遣を以て小高句麗建国に漕ぎつけたものと解せられるのである。

### 第三項 震（渤海）の建国と小高句麗の建国

大祚榮が今の敦化附近に比定せられてゐる東牟山註36に拠つて自立し、震國を建てたのは聖曆元年（六九八）である。史の伝へる所に依れば、彼は營州に居た靺鞨人の酋長で、萬歲通天元年（六九六）、營州の契丹人李盡忠・孫萬榮等が叛亂を作した時、同じ酋長の乞四比羽と共に唐の羈絆を脱し、亡命を領して東奔した。唐では李盡忠・孫萬榮等の叛亂を鎮定した後、契丹の降將李楷固をして彼等を追討せしめ、乞四比羽を破斬し、更に大祚榮に迫つたが、彼は高句麗・靺鞨人を糾合し天險を利用して却つて楷固を邀撃大敗せしめ、此の決勝を以て建国の礎を固めた。而して李盡忠等の鎮定後も突厥の勢力は愈々熾んで、此れに任せられた契丹は奚と共に此れに服事せざるを得ず、従つて唐の營州收復は依然出来なかつた。それが為め唐より大祚榮追討の大遠征軍を繰返へし派遣することは不可能であり、寧ろ逆に遼東の既得勢力さへ維持困難で、安東都護府撤廢の止むなき方向に進みつつあつた。而して大唐の營州恢復を断念せしめた突厥も亦滿洲の地を席捲せんとする挙には出なかつた。

由来、草原沙漠の曠野を馳驅する遊牧民族に取つて森林地帯の滿洲に侵攻することは容易でなく、従つて余程の力量差を自信しない限り軍を入れてゐない。軽卒な侵入は往々惨敗を招いてゐるのである。註37而して大唐の遼東引揚げを余儀なくせしめた突厥も完全に唐を屈服せしめ得る迄には強化し得なかつた。武后等の女禍に因つて唐の対外活動力は著しく鈍化し、辺境の争戦多く失敗してゐたとは云へ、その膨大な国土の上に太宗・高宗以来蓄積し來つた經濟力や、内外に対する政治的威信は、大きな潜在的実力として依然東洋の覇者たる貫祿を保持してゐた。玄宗の中興は此の潜在力を発揚顕現せしめたものに外ならぬ。突厥と唐とは一方が強力化すれば他方も此れに応じ、開元の末頃に突厥が全く瓦解し去る迄、互に一進一退の状態を刻みつつ、大局的には略々均衡を保つてゐたと云へる。大唐が引揚げたあとの遼東に対し、突厥は一

氣に此れを席捲することを企ててゐないが、それは此の両強の勢力均衡による所が多い。つまり突厥は遊牧民族として密林戦の不利を恐れてゐたこと、大唐を完全に征服して東進の余力を残す迄に強くはなかつたこと等のために、唐の引揚げたあとの遼東を直領とする能はず、小高句麗の建国を見送つてゐたのである。その突厥が更に輿地に在る靺鞨族に直接支配の進出を試る筈のなかつたことは云ふ迄もあるまい。震国が奥滿洲に建国の機を擲み得た外部的な条件は、かく滿洲が大唐及び突厥の双方の強大な圧力から解放せられたことに在る。勿論、震の建国からその大渤海国への發展過程に於いて、兩強国の勢力が全然波及しなかつたのではない。明かに相当顕著な圧力の波及を認め得るのであるが、それが通古斯系諸族の独自の活動を全面的に拘束して終ふ程の強大なものでは無かつたのである。尚震国の建国發展に就いては、その内部的な原動力を明かにする必要があり、そのためには内部的諸關係の解析究明が絶対に必要であるが、それは極めて複雑な問題で専考を要し、別に一稿を組みたい考へであるので、此所には詳説を省き、後文の展開に差詰め必要な二三の点を概説しておく。

先づ第一に指摘しておかなければならぬのは、震（渤海）国の支配階級としてその興亡盛衰を荷つてゐたのは高句麗人と白山・粟末靺鞨人とであつたと云ふことである。即ち濊貊系の通古斯族であつたのである。大高句麗時代に此の國の最高支配階級を構成してゐたのは云ふ迄もなく高句麗人で、此れに次いで白山・粟末靺鞨が重きをなし、高句麗人に協力して政權の支持を分担してゐた。然しその協力は高句麗人を主とし、靺鞨人を従とする隸屬關係に於いてであつた。白山・粟末靺鞨は彼等が夫餘・沃沮と呼ばれてゐた昔、高句麗に武力を以て征服せられ、初めは殆んど奴隸視せられてゐたのが、彼等はもともと同種族であつたこと、數百年にわたつて同一國民となつてゐたこと、久しい中国との攻争に一致團結して戦つたこと等、種々の事情に因つて相互の感情は融和し、靺鞨の地位も向上してゐた。然しそれにしても尙主從的な要素が強く残存してゐた。所が震↓渤海に於いては初めから三者對等の協力一致であつた。

第二に明かにしておかなければならぬのは、建国後に於いて一時安定してゐた領域、即ち史に震国又は渤海靺鞨と呼ばれてゐた時代の領域である。それは大体に於いて粟末・白山靺鞨の住域と高句麗発祥の地たる鴨綠・佟佳兩河流域とであつた。今少しく詳述するならば、伊通河との合流点附近より上流の松花江本支全流域（粟末靺鞨の住域。松花江の一大支伊通河流域を含むは勿論）、咸鏡南北道より間島を含んで敦化地区に至る一帯の地域（白山靺鞨の住域）、佟佳・鴨綠兩河流域（高句麗人）等に誇る広大な地域で、此れは嘗ての大高句麗の領土から新羅に没入した半島の地と安東都護府↓小高句麗の領下に入つた遼東とを除いた部分に当る。そしてその中には高句麗発祥の地が含まれてゐるのである。従つて小高句麗は勿論のこと、此の震↓渤海も亦大高句麗の系統を民族・領土・文化の各分野にわたつて繼承してゐたわけである。我が日本に來航した渤海の使臣が、「渤海国者、旧高麗国也」と日本に理解せしめて居り、又冊府元龜卷九外臣部・國邑門に「振国本高麗」とある如く、中国人にも同様に理解せられて居た所以の一は此所に見出される。大高句麗は震↓渤海と小高句麗との二国に分化繼承せられたものと見ることが出来る。かく兩國が同じ大高句麗の母胎から生れた兄弟的系統關係を有し、相隣接してゐたとすれば、兩國の間に特別深い關係が展開せらる可きことは予測するに難くないであらう。震↓渤海に關するここでの説明は以上に止め、次に主題とする小高句麗の建国と震の建国との關係に就いて考説する。

先づ震建国の年を検するに、それは聖曆元年で、小高句麗建国の前年に當り、従つて小高句麗建国の前奏曲となつた安東都護府廢止の年に當る。かうした年代關係は小高句麗の建国が此の震の建国と何らかの關係を有してゐたらしく思はせる。殊に同じ大高句麗の系統を引き、民族・文化・感情を齊しくしてゐたことを併せ考へれば、此れが無關係であつたとは見難い。

さて、安東都護府の廢止を断行せしめる上に最も大きな決定力を有つた狄仁傑の上疏を再び検討するに、その廢止可き理由として、陸路を遮断せられた唐は遼東への海上輸送にのみ頼らねばならぬ負担や犠牲が余りにも大きすぎることを、

遼東の石田（碓角の瘠田の意味）を守つた所で賦税するに足らず、収支償はないこと等の諸点と共に

靺鞨遼方。更爲鷄肋。

の一句をも挙げてゐる。此の句の意味する所は、靺鞨は遠方に在り、然も此れを取つたところで大した実利はなく、棄てた所で左程損のあるものでもない所であると云ふにある。而して此の靺鞨とは靺鞨諸族全体と見るよりも、大祚栄の勢力を指してゐるものと解す可きである。時に唐は大祚栄に対して討伐の方針をとつてゐた。そこで狄仁傑は、此の討伐方針をすてて大祚栄等の自立を認めた所で大唐に取つては大した実損無く、又敢て此れを伐ちその地を収めた所でそれ程利益はないのであるから、遠方の此の地に強ひて執着する必要は無く、此の点から論ずるも遼東を放棄して差支へないとの意見を立てたわけである。此れを裏返して云へば、靺鞨（震国）を征討する為めには遼東を確保する必要があると云ふことになる。大震国の中心たる今の樺甸県地方への大街道は、安東都護府の地たる今の撫順より渾河・英額河を遡り、輝発河の上源に出てその溪谷を下り、瑚爾喀河の上源に移つて此れを下行する古来の交通幹線であつた。従つて大祚栄を伐つ為めの前線基地としては遼東の地は絶対に確保を必要としてゐたこととなる。大唐の大祚栄に対する方針が征討論に傾いてゐる限り、此の地を放棄することは出来ない。然し此の方針を棄てて放任主義をとれば、此の立場よりする遼東保持の必要は無くなるわけである。李楷国の敗戦以来、大祚栄の基礎は強化したのに反し、營州の陥落によつて大唐本国よりの遠征軍派遣が事実上不可能となり、大祚栄征討の可能性は無くなつてゐたのであるから、早く征討方針を更めて別の計を立てるのが実情に即した賢明な策である。かく觀察すれば、東北政策の前線基地たる幽州の都督に任じてゐた狄仁傑が大祚栄討伐方針の変更、即ち靺鞨放任論を首唱し、更に此れと結びつけて遼東放棄論を唱へたのは至極妥当であつたと云ふ可きである。聖暦元年の安東都護府撤廃は、彼の意見に従つた唐朝が遼東放棄の方針を採つたことを示すと共に、大祚栄討伐の方針を一擲し、震国の独立を放任する政策に転じたことをも示すものである。又逆に震国独立の放任が遼東放棄・安

東都護府撤廃を決定せしめた一因となつてゐたと見ることが出来る。而して遼東より後退する唐として、奥滿洲に抛る大祚榮の勢力の将来に於ける發展を予想し、更にその發展に伴つて当然起る可き遼東への進出に備へ、此れが対策を講じておく必要があつた。滿洲に興つた勢力が遼東を占領して領土の一部とした時は必ず強大国家となり、中国北東辺の脅威となることは、高句麗の發展が史実を以て訓へてゐる所であり、然もその教訓は未だ生々しい記憶として唐人の間に残つてゐた筈である。震國の發展を刃思たらしめざる爲めには遼東進出を阻止する工作を施しておかなければならぬ。即ち遼東を無主の地として放棄することは策の得たものではない。殊に震國と遼東とは同民族として、又嘗ての同國民として、血と歴史と文化と感情とその他諸々の深い繋りがあり、震が若し同族の糾合、旧同國民の再結合を標榜して遼東の抱込みを策するならば、遼東の高句麗人が忽ち此れに響應する可能性は多分にあつたのであるから、唐が此れを警戒することは当然であつたと考へられる。結果よりすれば、震↓渤海は領土の開拓を先づ北方奥地に求め、南下策に対しては頗る慎重であつたが、当時の唐としてはその南下に備へて対策を立てる必要を感じざるを得なかつたであらう。半島引揚げに際してさへ、新羅・靺鞨の追尾的進撃を警戒した程の用心深い唐のことであるから、只のまま遼東を放棄することを如何に危惧したかは充分察せられる。唐が自ら長安で育てた大高句麗王家の兎孫を遼東に差遣して小高句麗國を建てしめた意圖の一は、かうした危惧を除かんとするに在つたに相違あるまい。即ち親唐的な王統を戴く小高句麗國を建てしめることによつて、突厥帝國の遼東進出を牽制せしめると共に、大震國の遼東領有をも阻止して大唐引揚げ後の東北辺情を出来るだけ唐に有利たらしめんとしたものと解せられる。そしてそれは同時に突厥と大震との二勢力の対唐結合を幾分でも妨げるに役立つものであるとも考へられたであらう。而して震國が遼東併呑を急いで小高句麗の攻滅を策する挙に出でなかつた理由としては種々考へられるであらうが、要するに建國早々の此の國にはそれだけの大実力が無かつたのである。尚震は此の後ち渤海國として着実に国力を伸張し、やがて海東の盛國と謳はれるに至るが、それでも終に遼東をその直轄領とはしな

かつた。但し小高句麗を属国としてその勢力圏内には収めてゐる。それには又それとしての理由があつたわけであるが、此所には詳説を省く。

以上、国際関係から見た小高句麗の建国事情に就いて論究した所を要約するならば、遊牧民族の營州攻陥・滿華交通幹線の遮断によつて、従来遼東に対して有して居た唐の統治力の後退が避けられなくなつたが、然も唐の勢力を後退せしめた遊牧民族も代つて此所を独占するだけの優勢な立場を克ち得ることは出来ず、又奥地に新に興つた震（渤海）も同様に此所を独占支配するだけの力を缺き、いわば周隣諸勢力の均衡によつて却つて此所が自立の機を与へられたと云ふ点に帰着する。但しその建国は此所の土着民たる高句麗人が此の好機を把へ、自らの力で闘ひ取つたものではない。後退に際して唐が尚爾後の政治的考慮を払ひ、庇護支援して建てしめたものである。即ちその建国は民族的活力の齎した自力の成果ではない。従つて只建国の一事から直ちにその国民の精力的な自立的活動、国家の大発展をその後に期待することは早計である。寧ろその發展性は期待薄であつたと見る可きである。史に建国後の情勢を概述して、勢力漸く寡少とあるのも、恐らくは一面の真情を伝へてゐるものと受取る可きであらう。蓋し、その住民の精銳分子が或は唐土内に遷され、或は叛乱に敗れて誅滅せられ、或は新羅・靺鞨・突厥に奔散して、大高句麗滅亡より小高句麗の建国迄に著しく去勢せられた実情を思へば、已むを得なかつた所と云へよう。然しそれにしてもとにかく一國を建て此れを保持し得たことは紛れない史実である以上、此の能力の内容の検討が必要であるが、それは別に小高句麗の治国民生篇として更めて取扱ふこととする。

## 註

55 震国の勢力範圍に就いては後述する

56 新唐書 卷二〇 高麗伝にも「元和末」として同内容の記事がある

57 渤海靺鞨が靺鞨の名を捨てて専ら渤海と称せられる様にな

つた事情や時期に就いては後文に論述する

58 金毓黻の渤海国志長編卷三による

59 冊府元龜 卷九 六四 外臣部・封冊門・同年二月の条、旧唐書 卷九

渤海伝等参照

60 「西接越喜靺鞨」は開元末天寶以後の状態である。詳細は

- 後文に論述する。
- 61 但し前者の「在高麗之北」が後者に於いては「本高麗」とあつて、ここに大きな相違が見出されるが、兩者共に史実である。震↓渤海の始祖大祚榮は高麗の別種と云はれ、その支配階級には高句麗の遺民が多く、その本土は大高句麗故領の一部であつた。
- 62 前出、津田博士「安東都護府考」の附説「賈耽の道里記に就いて」に此の説が見える。
- 63 旧唐書<sup>卷一</sup>李正己（淄青平盧軍節度使）伝に略。共十有五州。内視同列貨市渤海名馬。歳々不絶。
- 64 とあつて渤海貿易の巨利を得てゐたことを伝へてゐる。拙著「支那中世の軍閥」第三章第三項。東洋学報第二十六卷第四号乃至二十七卷第三号所載の拙稿「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」等参照。
- 65 唐旧書<sup>卷八〇</sup>揚志誠伝、資治通鑑<sup>卷二四四</sup>等の太和五年五月の条に見える宰相牛僧孺の言を参照。
- 66 此の記事には若干の誤字を含んでゐる。詳しくは後文に説明する。
- 67 資治通鑑<sup>卷二〇三</sup>光宅元年（文明元年）十一月の条に同記事あり。
- 68 前出、津田博士「安東都護府考」附説「賈耽の道里記に就いて」
- 69 渤海国志長編<sup>卷三</sup>・世紀第一に依る。  
註68に同じ。
- 70 小高句麗の建国
- 71 前出、「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との關係」杜佑は代宗・徳宗から憲宗時代にわたり、七十八歳の高齡を以て歿した。その著の通典は徳宗の貞元十七年に成つたと云はれ、内容として記す所は大体玄宗の天宝末迄であるが、時に肅・代二帝の治世に及んでゐることもある。
- 72 賈は衍字であらう。資治通鑑にはない。
- 73 資治通鑑<sup>卷二〇二</sup>及び<sup>二〇三</sup>、旧唐書<sup>卷五</sup>高宗紀等に拠る。尚突厥の復興に就いては後文に再三論及する予定である。
- 74 唐会要<sup>卷九</sup>高句麗の項に同記事あり。
- 75 唐会要<sup>卷七</sup>都護府の項に同記事あり。
- 76 已述の如く新唐書・地理志の靺鞨州の項に遼東の二十三州名を列挙した後「右隸安東都督府」とあるは小高句麗王が安東都督として二十三州を統治しつつ、都護府の靺鞨に服してゐたことを示す。
- 77 神功元年の前年、萬歲通天元年、契丹の李盡忠等が營州を陥れてゐた。詳しくは次項に述べる。
- 78 新唐書<sup>卷一</sup>の伝、旧唐書<sup>卷九</sup>薛訥伝等参照。訥も父仁貴に劣らぬ名将であつた。
- 79 「満鮮地理歴史研究報告第十六冊」所載の池内博士「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」と題する論文の第五章第二項「安東都護府」に於いては、儀鳳二年、高蔵が遼東に遣歸せられたのは安東都護としてであつて、彼は忽ち失脚したけれども、都護の職は彼の児孫に依つて繼承せられたと述べて居られる。然し此の説は誤りである。高蔵は都護

としてでなく、遼東都督として遣帰せられたこと、諸史の一致して明記する所である。遼東都督を遼東州都督としたり、遼州都督と記したのもあるが、正しくは遼東都督たる可きこと、本文に論証した如くである。又都護府撤廢當時の都護が薛訥であつたこと、資治通鑑卷二五萬歲通天元年九月の条の記事に時の安東都護が裴玄珪であつたとあること等は、共に高氏の都護世襲説を容さぬ有力な反証である。以上、主として滿鮮地理歴史研究報告第一卷所載、松井等氏「契丹勃興史」に拠り、此れに若干の私見を補足した。例へば雨季には河川が氾濫して道路を毀ち橋梁を押し流し、その修復は放任せられ勝ちで通交に難渋してゐたと云ふ。此れは三国志の伝へる所であるが、かうした自然の制約は後年に於いても変りなかつたであらう。

82 81  
南北朝の末、伊通河の流域に住む靺鞨を従へた突厥が高句麗の新城に寇し、又勃興初期の契丹の阿保機が遼東に侵入して此所を占領し、やがて東京道をおいてゐるのはその例である。

83  
後梁と契丹との海上交通に就いては史学雑誌所載、拙稿一五代時代に於ける契丹と支那との海上貿易」参照、尚後篇に於いても詳述する予定である。

註84に同じ

86 85  
滿鮮地理歴史研究報告第一冊、津田博士「渤海考」は大祚栄自領の地を後ちの中京顯徳府なりとし、此れを今の敦化地方に比定し、東牟山をその近傍の山ならんと論ぜられてゐる。此れに対しては鳥山教授の異論があり、又金毓黻氏の渤海國志長編卷一「地理考第一」に於いては中京顯徳府を吉林省・

樺甸県の蘇密城に比定し、且つ大祚栄立國當時の都は此所では無く、別の地であつたのであらうと論じてゐる。別に滿州歴史地理第一卷、松井等氏「渤海國の境域」には顯徳府を那丹仏勒に比定しており、最近では東洋學報十六卷四号、和田博士「渤海國地理考」に於いて東間島の西偏、西古城子に比定する説が出されてゐる。諸説紛々としてゐるが、何れにしても敦化周辺の地区であつたことは紛れない様である。南北朝の末、高句麗の新城を侵した突厥が敗れ去り、大祚栄を追つた李楷固が天險に大敗してゐる等はその例である。契丹の太祖阿保機は長嶽大渤海の首都龍泉府を一氣に攻略したが、此れは奇襲的突貫作戦の一时的な奏効にすぎず、且つその奏効も渤海内部に起つてゐた大内訌に助けられたものであつた。首都攻陥後の戡定戦では散々苦勞し、最後に阿保機自身病を得て陣歿した。その後ち渤海遺民の對契丹反攻を抑へる為めに契丹軍が奥滿洲深く遠征を試みたことがあつたが、却つて手痛い損害を受けて引揚げてゐる。平原戦に長じた彼等も山險密林の戦には至つて拙劣であつたからである。

純日本紀一〇・神龜四年十月の条。

後年に於ける金や清に就いても同様のことが云へる。滿州の中、經濟的に最も發達した地は遼東である。それが遼東を領土とした時、彼等が遼に強大を加へた最大の原因である。夫餘・勿吉・後渤海等は強國ではあつたが、中國の脅威とはならなかつた。彼等は遼東を領有してゐない。遼東を領有せざる限り脅威とならなかつたのは、その地理的關係にも因るが、又彼等が此所を支配せずして中國を脅かすに足る丈の勢力に強化する經濟的根柢をもち得なかつたからである。

## On the Foundation of Little Korean Kingdom

By K. Hino

In 668 A. D., Korean Kingdom was conquered by *Tang* Dynasty and the king was taken away to *Changan* 長安 as the captive. Then, *An-tung Tuhufu* 安東都護府 (government-general) was founded to govern the annexed district, *Liao-tung* 遼東. In some of the documents, however, we find frequently the descriptions about the Korean Kingdom from 699 to 918 A. D.

By the invasion of *Kitai* 契丹 into *Liao-hsi* 遼西 district (696 A. D.) *Liao-tung* was isolated from China. Owing to this, *Tang* Dyanasty abolished the *An-tung Tuhufu* in 697 A. D., then in 699 A. D. released the descendant of the captive king and let him revive the Korean Kingdom in *Liao-tung* as the independent country. That was the foundation of the Korean Kingdom, which appeared again on history from 699 A. D. and continued for two hundred years more. Her territory was that of the *An-tung Tuhufu*, accordingly, smaller than that of the former kingdom. But this kingdom has been overlooked hitherto by the scholars. I name this Little Korean Kingdom 小高勾麗国, distinguishing from the former one.

When *Kitai* and *Turk* revolted against *Tang*, *Chên* 震 (渤海), taking this opportunity, founded the state in inner Manchuria (698 A. D.) and *Silla* 新羅 in Korean Peninsula also became powerful. In order to face these disadvantageous foreign relations, *Tang* Dynasty returned the descendant of the former Korean king, who had been educated in *Changan* 長安, to *Liao-tung* and let him found the Korean state, intimate with China.

That was the reason why the Little Korean Kingdom was founded.